

俳句雜誌

令和五年三月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十六卷第三号

# 水明

2023 3月号



《今月のかな女》

土筆野やよろこぶ母につみあます

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

春も半ばの頃、野原や川の土手、田の畦などに生える野草摘みは実に楽しいもので、弁当持参で一日のんびりと時間を過ごすことができる。立春の前から頭を出す露の臺に続き、あちらこちらに土筆が群生する。土筆の袴をとって煮物にしたり、和物や佃煮にしようと、かな女が母上と一緒に土筆摘みにきている。母のために摘み残しつつ先へ進んでゆくかな女の姿が見える。

(鬼之介・註)

# 水 明

第1110号

— 華の一句 —

隅の井は城のぬけ穴寒昂

田寺玲子

城郭の片隅に設けられている井戸であるが、中には水が無く空井戸である。その目的は、戦時において密かに城を抜け出したり外から潜入するためのものであったと思われる。ここまででは真面目な解釈で、これからが鬼之介流の与太話。時代劇専門チャンネルでお馴染みの徳川八代将軍・吉宗さんが、江戸の市井探訪に使った空井戸だと思ふと実に楽しくなる。  
(鬼之介・推薦)

# 水明

令和5年  
3月号

今月のかな女

華の一句

春しぐれ (作品)

春早々 (近詠)

我が家の窓より (近詠)

百尺竿頭 主宰作品の鑑賞

硯箱 季音月評

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

山本鬼之介

西山貴美子

茂木和子

五明昇

井口俊晴

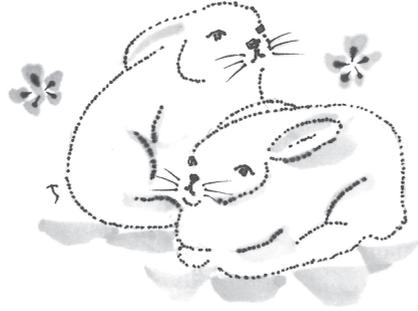
鈴木康世 田寺玲子  
十倉和子 ほか

梅澤佐江 井上玲子  
正木萬蝶 ほか

青木鶴城 河野はるみ  
保坂翔太 ほか

小久保佳世子

網野月を



# 水明集

小林京子 新 暦文  
梅澤輝翠 ほか

水明集作品評

山本鬼之介

44

水琴窟 (水明集一月号鑑賞)

池田雅夫

48

山紫集

50

鼓笛集 (同人作品)・私の一句

56

「野の花文化賞」受賞 (鳥羽谷俳句会)

59

水明の記事他誌転載

63

新春俳句大会の記

保坂翔太

61

水明例会報・各地句会報

65・68

水明全国大会兼題句募集

73

若狭句碑めぐりバスツアーのお知らせ

75

春の吟行会・全国大会のお知らせ

74

風声・発展基金御礼

76

後記

78

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

---

---

# 春しぐれ

山本鬼之介

悔恨の唇かめば春寒し

寒もどり鉄道模型はしる部屋

明治座へ向かふ足取り春時雨

---

早春やはじめて文字を習ふ見ら  
光るものなき骨董市や実朝忌  
観梅や切つた張つたの日日忘れ  
移住せし夫婦に春の地平線  
春菊買うてロマンスグレーバスを待つ

# 春 早 々

西 山 貴 美 子

風 鎮 の 気 儘 な 暮 し 去 年 今 年  
水 鳥 や ず ん べ ら ば う に 朝 が 来 て  
千 両 箱 の 紐 が す る り と 初 寝 覚  
時 刻 表 座 右 に 年 酒 傾 け て  
水 仙 や 佳 名 の 宿 の 厨 口  
老 梅 ふ ふ む 酸 素 が 少 し 足 り ま せ ん  
時 刻 表 に 捲 れ 疵 あ り 春 の 卓

つい昨日の事の様に思えてならないが、ブルートレインが好きで、用もないのに東京駅へよく通った。夕靄の中を遠く消えてゆく尾灯が何とも好きだった。今はもう姿を消したが、ブルトレにはなつかしい思い出が一杯ある。そんなこんなで私は乗り物好きになった。同時に時刻表のかくれファンになった。

俳句の歳時記と出会って久しくなる。今年こそ「時刻表一人旅」としやれこんでみたいと思っている。

# わが家の窓より

茂木和子

咲き初むる蘭や乙女の胸さわぎ  
蘭の花咲く順番の律儀なり  
蘭咲くや鹿鳴館の時思ふ  
あの日あの時思ひの過る蘭の花  
庭に鶴・椋来てどつと寒雀  
飛び歩く矮鶏の鶏冠冬の庭  
子供と犬と戯れ合うてゐる冬日

二〇一九年七月八日の全国大会で「俳句四季」より頂いた胡蝶蘭、大会後は発行所で預かり面倒を見ていましたが十一月一日自宅へ頂いて来ました。今年で五年目になります。毎年一鉢一茎に六個〜七、八個の花芽が付きます。今年も又付きました。頂いた胡蝶蘭を三鉢に分けましたので、全部咲き揃いますとその景は、そこだけ別世界になります。

コロナでの家籠り、ロシア・ウクライナの戦争など目を背けたくなる事ばかりの世の中です。花を観ている時、自然に身を委ねている時、平穏で優しい気持になります。

# 百尺竿頭

● 主宰作品の鑑賞

五明昇

十二月号

牡蠣ふんだんに広島焼の分厚さよ

関西風のお好み焼が生地と具材を混ぜ合わせる「混ぜ焼き」であるのに対し、広島焼はキャベツ・生地・麵・具材・玉子を層状に蒸し焼きにする「重ね焼き」が特長である。これに地元宮島産のぶりぷりした牡蠣をたっぷりとトッピングすれば、濃厚なソウル・フードの出来上がり。ビジネスマンも旅行者も病みつきになること請け合いだ。

若き遺影はかつての学徒黄落期

太平洋戦争下で行われた「徴兵猶予措置」の停止に伴う文科系学生・生徒の「学徒出陣」。学業半ばで出陣した推定二十数万人の多くが大陸の山野に、南海の果てに若い生命を散らした。黄落の季節、金色の葉が相次いで落ちるさまは妙に明るく潔くもある。「挺身以って頑敵を撃滅せん、生等もとより生還を期せず」と誓った学徒の遺影を前に言葉も無い。

冬麗やわが心中のスナイパー

スナイパー（狙撃手）は、標的から長距離を隔てて狙撃を

行うための訓練を受けた要員のこと。冬の晴れた日、春のように穏やかで明るい空の下で、作者の心中に去来するものは……。ベルリンの壁を境に展開される英独諜報部の暗闘を息詰まる筆致で描いたジョン・ル・カレのスパイ小説『寒い国から帰ってきたスパイ』の一場面を連想させる。

陣羽織脱ぎたるごとく散る紅葉

陣羽織は戦場において武将が鎧の上から羽織ったもので、実戦で雨や寒さから体を守っただけでなく、武将の威厳を示す装飾品としても豪華絢爛の様相を呈した。折から山野に散り敷く紅葉は、まるで武将がその百花繚乱の陣羽織を脱ぎ広げたごとくに見事である。視座の確かさと取り合わせの妙が読者を酔わせる一句だ。

新巻や荷札のむかし懐かしむ

宅配便の登場以前、個人がモノを送るためには、届け先や荷送り人名などを書いた厚紙の荷札が活躍していた。新巻鮭はかつての甘塩の鮭を荒筵で巻いていたが、贈答品の普及につれて臓器を取り塩を詰めた現在の形となり、荷札の代わりを送り状を貼付する形に変化した。到来の新巻鮭からは、何

もかもが素朴だったあの頃が懐かしく思い起こされる。

## 一月号

### 由緒書読む極月の蔵の中

蔵は家財や商品などを安全に保管するための建物だが、時に子供たちの遊び場や秘密基地に変身することもあって思い出深い場所だ。年末の整理のために久々に蔵に入り込んだ作者が、ふと見つけたわが家の由緒書に読み耽っている。由緒書は物事の起源、由来、系譜などを記したものだ、とりわけ家の来歴や系譜、親族などを記した書類には尽きせぬ興味がある。気忙しい年の瀬のほっとするひと時を詠んだ一句。

### 虎落笛断つ津軽じょんがら節の撥

「津軽じょんがら節」は青森県津軽地方に伝わる日本の民謡で、津軽三味線の伴奏とともに唄われる他、三味線だけの「曲弾き」でも良く知られている。津軽三味線は盲人の門付け芸として発達した経緯から胴も駒も大きく、太棹で糸も太めのものを使う。このため音が幅があり低音が良く響くのが特徴。日本海の烈風が作る虎落笛の音も、水牛製の厚手の撥がたたき出すじょんがら節の前にかき消され勝ちだ。

### しめやかに蜜柑の筋を取る女

部屋の隅でしめやかに蜜柑の筋を取る婦人が表題の「氣に

なるひと」であろうか。蜜柑は本来、その鮮やかな色彩と味覚で、冬の到来や年の瀬の浮き立つ気持ちを感じさせる果物だが、この景は何か沈んでもの悲しい。蜜柑の果肉についている白い筋は「アルベド」と呼ばれる維管束で、水や栄養を果実に配給する大切な道筋だという。この筋を取るという行為が、大切な人との別離を連想させる象徴的な一句だ。

### 稜線は寝釈迦のかたち山眠る

各地の寺院に点在する「涅槃図」によれば、釈迦は入滅の際に頭を北にして西を向き、右脇を下にした姿で横たわったと伝えられる。この故事に基づいてか、各地に山容が釈迦入滅の姿に似た「寝釈迦」と呼ばれる景観が伝承され、鈴鹿・釈迦ヶ岳、南アルプス・鋸岳、阿波富士・高越山などはその代表例だ。寝釈迦を彷彿とさせるしなやかな山容で眠る山々に、人は何を想うのだろうか。

### 行平にいま会心の冬至粥

行平（行平鍋、雪平鍋）は厚手の陶製の鍋で、蓋、持ち手、注ぎ口がついたもの。過熱が穏やかで保温性に富み、粥や重湯を炊くのに適しているが、現在は銅・アルミ・ステンレスの打出鍋が多く出回っている。今しも、この鍋で「冬至粥」がおいしく炊き上がるようとしている。粥に入れる小豆の赤色は魔除けの色として厄払いとなり、冬至粥には一陽来復の運氣を呼び込むという願いが込められている。

# 硯箱

◆季音一月

井口俊晴

散る木の葉ひとつふたつは鳥になり

十倉和子

一瞬の風に、黄色くなつた銀杏の葉が、カサカサ音を立てて舞い落ちてくる。このの銀杏並木は、数の多さと太い幹の見事さで、長年多くの人に愛され続け、ちよつとした名所になつている。前を行く長い髪の女性に二、三枚、そして、そのずつと先を歩く白髪 of 紳士の肩には一枚。ひらひら、ひらひら、そのうちの一枚か二枚は、きつと黄色い小鳥となつて、何処かへと飛んで行くのに違いない。

耳聴く夫の靴音聞く霜夜

永野史代

寒い夜である。サラリーマン時代からの友人に会うと言つて、早くに出かけた夫は、この時間になつても、まだ帰つて来ない。いい歳をして飲み過ぎてゐるのではないか。電車を乗り過ぎしたのかも。心配してゐるうちに腹が立つてくる。と、通りに聞きなれた夫の靴音が聞こえてきた。長年の間に

靴音にも耳聴くなつてしまつた私である。

空仰ぐ庭師の茶どき小春かな

星野和葉

植木の手入れをすませ、すつきりした気分で新年を迎えようとする人が多い。だから、今時分は忙しそうな庭師の姿があちこちで見られる。小春の日差しが心地良いきょうは、青空が澄み渡つて雲一つない。親爺さんは、そんな空を見上げ、これから暫しお茶の時間だ。何はともあれ、まず一服、満足そうに煙を吐き出す。医者には前から禁煙を勧められてゐるそうだし、奥さんにも苦い顔をされると言つてゐるのに、若い時分からなので、どうにもやめられないらしい。

朝刊にありし湿り気今朝の冬

荒井俱子

きょうは立冬。いよいよ寒い冬が始まつた。白い息を吐きながら郵便受けから朝刊を抜き取つた時に、紙の重みと同時に、指先が有るか無しかの湿り気を感じた。人々が寝静まつ

た深夜の時間帯、編集局の手を離れた記事は、高速で唸る輪転機で印刷され、走るトラックの荷台で冬の冷気をたつぷり吸い込み、バイクで配達される頃にはすっかり冷たくなってしまうている。その新聞の高と重みが、一瞬の間、私をたじろがせる。

### 布団重し姉入院と聞きし夜

松山清子

姉が入院したと甥っ子から電話があった。甥はもう四十代になっっているはずだが、さすがに気が動転しているのか、声の調子が病状の深刻さを窺わせる。三歳上の姉とは、子供のころから仲が良く、一緒に遊んだり、勉強を教えてもらったりした。その姉が…と思うと、夜の寒さが身にこたえ、押し入れから引つ張り出す布団がやけに重く感じられた。

### タップダンス坂を転がる柿落葉

野田静香

靴で床を踏み鳴らすリズムカルな音、タップダンスは踊る人も見ている人も、どちらもが楽しくなる軽快なダンスだ。いましもステップに似た軽やかな音を立てながら、柿の落ち葉が坂を転がって行く。柿紅葉は赤だったり黄色だったり、時には虫食いの黒い穴があったり、思わず見惚れるほど美しい。可愛い踊り子を連想させる鮮やかさなのだ。

### 三寒はペン持ち四温は筆を手

宮崎紫水

三寒四温とは、三日間厳しい寒さが続くと、あと四日間寒さが緩む厳寒の頃の特徴だそうだが、私には「四温は暖かい」というイメージが強かった。それで、なぜ寒いとペンを持ち、暖かだと筆になるのか？そんな疑問を抱いたのが鑑賞の発端。そこで、書家に寒い日は筆が持ちにくいものかどうかと質問をした。そんなことはないというのが返事だった。いつも筆記具を離さず、句作に励んでいる作者の姿が目につかび、頭が下がる思いがした瞬間だった。

### 小春日の少し離れてババゴリラ

下川光子

春が来たような暖かい冬の午後、動物園は親子連れで賑わっている。ゾウは長い鼻をぶらぶらさせ、カバは大きな口を開けて欠伸している。さて、ゴリラ一家はというと、ママさんゴリラに、やんちゃ坊主が頻りと甘えている。そんな母子からちよつと離れた岩の上で、ババゴリラは日向ぼっこ。幸せなのか、それとも不幸せなのか、どうも人間社会の縮図を見たような気がして、こちらとしては、その距離が何とも気になるのだ。

# 季音雪



卒寿の屠蘇 鈴木康世

恙がなく生きて卒寿の屠蘇祝ふ  
初夢に富士を登りし吾と会ふ  
書初や生きるの筆の潔し  
賜はりし「仏心独語」読み初む  
人日や M R I の脳画像

芝居小屋 田寺玲子

月冴ゆる城下に古き芝居小屋  
月冴ゆる橋脚を打つ波の音  
初風や神話の島の明けそむる  
隅の井は城のぬけ穴寒昂  
日脚伸ぶ源氏香聞く紫野

日脚伸ぶ 十倉和子

寒 鴉 西山貴美子

揚舟に幼と仔犬日脚伸ぶ  
杭ごとの海鳥ひかり日脚伸ぶ  
郵袋も渡船場仲間日脚伸ぶ  
雪吊りは園の堅琴奏でたし  
肖像画の楽聖たちへ笛子鳴く

沈痛とは呆けることなり冬苺  
なんぞやコロナ寒の鴉に囃さるる  
夢の中芍薬の芽を踏みさうな  
寒鴉哲学の目となりおほす  
戒名の一字を思ふ寒の水

返事来ぬ 永野史代

七日粥 波多野寿子

井上靖読むしろばんば舞ふ頃か  
十二月八日返事の来ない手紙書く  
喉唸らせる犬傍らに牡丹鍋  
かりそめの手と手を繋ぐ置炬燵  
終電車降り満天の冬の星

床の間の花を優雅に年始め  
いとけなき曾孫等駈け来るお年玉  
初弾きや唄しんしんと部屋に満つ  
四代の親子の囲む屠蘇の卓  
吾娘の手に触れしぬくもり七日粥

寒 月 光 星 野 和 葉

日の丸に朝日真つ直ぐ淑氣満つ  
一日の糧を初湯に溢れしむ  
心揺るふと冬ばらも揺れにけり  
ロマン満つ月に寄り添ふ冬の星  
サボテンの棘を磨きぬ寒月光

切 山 椒 茂 木 和 子

初風呂や稚の大きな尻に打たる  
針起しまさかまさかの裾かがり  
染め抜きの褪せし暖簾や切山椒  
母の元気に買うて行く切山椒  
お茶請けに切山椒のおもてなし

松 の 内 矢 作 水 尾

掛軸の鷹と寿ぐ松の内  
崖水仙真鶴岬すぐそこに  
掬の如く寒鴉の群が聳へと  
古刹の大樹黒胡麻のごと冬鴉  
法要の香の名残や冬座敷

ね ぎ ま 鍋 山 中 み どり

千筋に朱の帯締めを春隣  
帯止めは象牙の兎寒紅梅  
初句会締めて屋形の客となる  
七つ橋冬夕焼の川下り  
冬の日のとつぷり暮れてねぎま鍋

金砂のごとき

柚木治子

初

春

網野月を

寒風やかな女探せり中仙道  
初詣卯年の水を吐く石兎  
葉隠れの術で風受く寒椿  
暮れがたの雨呼ぶ匂ひ冬桜  
初湯して金砂のごとき星数ふ

正月の三和土の広し日矢確と  
初空や差伸ぶる掌に松葉影  
瞬きは見ても見えない初鏡  
二声三声続きて影や寒鴉  
仏の座母ほどの阿弥陀さま

待 春

由良ゆら女

冬 の 星

石井喜恵

仏壇に礼の一灯去年今年  
障害を人馬一体騎馬始  
艶やかな馬体ゆげ立つ寒の入  
明眸や湖風を聴く寒蜩  
待春の窓辺にほどく蝶糸

木洩れ日を掃きて終りぬ落葉搔  
パオ並ぶ大草原の冬の星  
冬の星窓辺に歌ふセレナーデ  
後れ毛の耳をくすぐる湯ざめかな  
心地良き目覚めの一日福寿草

とんとんと

石山 かつ子

風 花

大村 節代

精巧な切絵に似たる穂長かな  
年寄りてこそこの誇りや齒朶飾る  
とんとんとと餠切る音や春近し  
吾よりも頭脳明晰冬鴉  
寒鴉村社の森を栖とし

初狂言来ぬ穴番を待ちに待つ  
吉川英治描く武蔵や寒稽古  
豆絞りの手拭首になづな打つ  
天空へ昇る石段風花す  
風花や村ごと老いて丸ポスト

獅子舞 大橋 廸代

御法度 小倉 倭子

光頭にねぢり鉢巻獅子の笛  
獅子舞へばつぱと浴びせ魚籠の塩  
獅子頭脱ぐや半身もいろいろに  
三世代交はすラインのなづな粥  
日脚伸ぶ足湯仲間の鳩三羽

寒梅や筋金入りの宮大工  
見詰むれば心刺したる冬薔薇  
祝盃の酒も御法度寒の水  
神木を掠むる一声寒鴉  
一枚の葉つぱを啄む寒鴉

大福茶 栢尾 さく子

寒 夜 五明 昇

口中は祭りの如し屠蘇一献  
寂寥の色は緋色か猩猩木  
大福茶皺の手伸ばし頂きぬ  
正月の仏間に鉄腕アトムの絵  
泣きながら動かしている祝箸

木枯の吹き残したる一つ星  
凍星や灯台一つ島ひとつ  
海を向く漁師の墓石冬北斗  
眉月を透かす銀座の冬柳  
駅そばの湯気の親しき雪催

初明かり 菊池 ひろこ

泪 の 訳 境 延 昭

初明かり昨夜伏せたる鍋と箆  
元日も紅茶に洋酒垂らし夜  
門松と背丈おつかつ子沢山  
異次元にありや追憶冬薔薇  
眠る山岳父と思ふ逃亡者

若水や長子に多き役回り  
初夢の泪の訳が分からない  
冬ともし銀巴里ありし七丁目  
覗き見の出来ぬ鍵穴冬の萌  
冬の蜂最早ジルバは踊れない

手鞠麩 椎野美代子

若水の笛吹きケトル高らかに  
鶏小屋に擬卵ころがる初景色  
女正月花麩手鞠麩春慶碗  
めでたさや屠蘇器に沈金鶴の舞ひ  
今朝の春佳き名づくしの和菓子店

去年今年 島津初花

千枚の写経の厚み年の夜  
初墨や「飛躍」の文字の宙を飛ぶ  
初湯して昭和生れの齡繰る  
鎧のごとき寒鯉の鱗かな  
背凭れの椅子にひと日の寒雀

# 生誕人俳句

特集

突然は五七五

飯島ユキ／飯田冬眞／今泉礼奈／太田うさぎ  
太田土男／大高霧海／梶原美邦／加藤哲也  
河瀬俊彦／川村智香子／近恵  
杉原祐之／杉山久子／涼野海音  
高勢祥子／竹内宗一郎／丹野麻衣子  
長島衣伊子／中西亮太／なつはづき  
名村早智子／蜂谷一人／原 雅子  
星野いのり／本田攝子／松尾隆信  
松王かをり／三木基史／森須 蘭  
柳生正名／陽美保子

●巻頭三句

寺井谷子

黛まどか

菅野孝夫

大竹多可志

吉原文音

吉川禮子

●今月の華

加藤峰子

水野星閣

●俳句と短歌の10作競詠

高山れおな

大口玲子

●好評連載

南伸坊

筑紫磐井

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

神作研一

―のひらの江戸―  
―古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

二ノ宮一雄

# 俳句四季

Haiku Shiki

2023年4月号

3月20日発売  
定価1100円(税込)

http://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

# 季音月

水仙花

梅澤佐江

ヴィーナスなれや初湯ゆたかに溢れしむ  
元日草とうに越したる妣の齡  
飢ゑの声残してゆくや寒鴉  
水仙や生涯教師たりし母  
真つ直ぐな意志切り岸の水仙花

米寿の光

井上玲子

若水に米寿の光汲みにけり  
米寿まで生きて春着の裾捌き  
水仙を供花とし香り分かち合ふ  
野水仙活けて岬の風立ちぬ  
春隣鳶輪をかく由比ヶ浜

正月とカレー

正木萬蝶

天金の孤高の句集淑氣満つ  
伊勢海老の髭の饒舌妻の無言  
伊勢海老の何を隠すや腹の内  
初富士の常より赤し世は不穩  
三日はや「ハウスバーモンとかレーだよ」

地平を望み

池田雅夫

立春は暦の上と知りつつも  
爪先を屈むる老軀冴返る  
傷心や春の時雨に濡るる髪  
風の子の甲高き声薄水  
ただただに地平を望み麦を踏む

春の響き

鳥羽和風

立春や水琴窟にある響き  
せせらぎに膨れて光る猫柳  
笑ふ子も泣く子も元氣路の臺  
猫柳水車は詩を奏でつつ  
畦焼けば黒で縁取るハガキかな

鍵 穴 大場 順子

秘色の空より雫竜の玉  
玉砂利の音も神慮と初詣  
母となる札深々と初詣  
差し込めば鍵穴震ふ寒の入り  
麦の芽の縞なす畝や遠筑波

日脚伸ぶ 森本 早苗

無住寺に響く鳥声初詣  
駅伝の襷羽根生ふ三日かな  
日脚伸ぶ鳩の微睡む天守閣  
寒風や飽きず眺むる朱の鳥居  
大鳥居控へて育つ牡蠣筏

腹七分 井上 燈女

ガラス戸に人影「お寒むございます」  
独り居の束縛のなき寝正月  
葱焼いてとろりと甘き母の味  
一食は雑炊にして腹七分  
母といふ止り木もあり初厨

若 水 丸山 マスミ

墓碑に「寂」ただ一文字の淑気かな  
晴れ晴れと若水捧ぐ巫女の腕  
波洗ふ大巖窟の注連飾  
左利きの多き家系や祝箸  
矢立初めの碑確しかと冬柳

初詣 高島 寛治

初詣無理せず選ぶ女坂  
太箸や昭和の家族陣の座に  
麦の芽や大地に遍あまねく日のひかり  
冬の雲風雲急を告げる如  
竜の玉潜る小犬の尾が嬉し

初車 松井 由紀子

ふるさとへ空翔くるがの初車  
冬椿まづ一輪の紅の濃き  
大寒や半分白き氣象地図  
熱の子へ葛湯まあるく溶きやりぬ  
それはそれで清しきかたち冬薔薇

雪 催 荒井 俱子

屠蘇を酌む身ぬちに邪氣を飼ひならし  
金箔を泳がせて酌む年始酒  
留守電の赤き点滅雪催  
雪催コンビニの灯が煌煌と  
風花の光の中に下校の子

初場所 藤澤 喜久

初場所や満員御礼の土俵入り  
着ぶくれてドッコイ相撲甚句かな  
頬被り音羽屋に似し小百姓  
セコハンも明けりや晴着よブーツ履き  
冬夕焼ラムチョコ口に溶けてゆく

龍の玉 内田 恵子

龍の玉暗き星見ゆ銀河系  
若水の珈琲苦し戦なほ  
寒の大地に吉兆さがせドローンよ  
風の子の面子遊びや龍の玉  
ふるさとの焼餅ながく長く伸び

大道芸 町野 広子

枯葉降るマリアの肩に触れつ降る  
枯葉降る降るさあワルツを踊ろう  
枯柳レンガ広場に大道芸  
雨戸繰る中天にはや冬の星  
一駅を歩いて戻る冬の星

初東雲 松宮 保人

高山寺もみじ落葉を拾ふ庭  
小春日や鳥獣戯画の巻長し  
一札す初東雲の大鳥居  
娘三人厨房に立つ二日かな  
孫子去り慣れし三日の夜の二人

回転椅子 森川 義子

高すぎる回転椅子に春着の子  
水仙や枯山水の石の妙  
水仙花一途に生きて父母の墓  
初芝居作り眼の見せ所  
華やかに揃ひの法被初仕事

十二月 井口俊晴

四角の窓をまあるく磨く十二月  
雪催議事堂前にデモの列  
奇つ怪なドローンの飛ぶサンタの夜  
育メンの我に誉れのあかぎれぞ  
伊勢海老や雑魚を蹴散らす赤備

水仙 山田美佐尾

水仙の舞台が海へ迫り出せり  
一本の水仙の剣凜として  
買初の人形焼は七福神  
寒鴉そこのけそこのけ出荷場  
酔眼の女はいつか雪女

霜柱 川崎道子

托鉢の草鞋きしきし霜柱  
歌留多取り彼の得意の札を取る  
歌留多取り寡黙な人が声をあげ  
日脚伸ぶやうやく寝返りする赤子  
昨日より濃く見ゆる潮目日脚伸ぶ

陰と陽 渡辺舍人

初御空西陰陽の雲靡く  
男正月女正月初句会  
真青ゆゑ風揚げを見に宙を觀に  
霜焼の耳にユーミン聴かせやる  
毛布にくるまれ誰が愛と云ふのやる

お正月 福田千春

近づけぬ神を遠目に初詣  
いかめしき伊勢海老ちよつとやぶ睨み  
去年より小さく賽の目雑煮餅  
手には肉刺まめかなたへ揚がる風  
初句会干支の兔のお菓子あり

コロナ陽性 松山清子

延命処置問ふ保健師や年の暮  
咳き込みし隣のベッド妊婦なり  
防護服の看護師忙し大晦日  
病室に黒豆ごまめ祝箸  
初日享けベッドの上の指体操

リズムミカル 野口和子

七草や厨の音のリズミカル  
忘却といふ贈り物雪催  
機嫌よきミシンのリズム小正月  
釜めしを買ひて初旅心地かな  
初詣農具露店の人ばかり

初詣 西浦千枝子

一軒家に真つ赤な外車お元日  
餌をまくやどつと寄り来る初雀  
白波立つ南紀の浜や日脚伸ぶ  
宮の決め事律儀に守り初詣  
絶景や雪を被りぬ紀州富士

上州街道 松本光子

風花に暫し明るき上州路  
風花舞ひワイパーうたふ高速道  
奥利根の畦道長し空つ風  
裏妙義澄みし奇岩に暮早し  
風花舞ふ両手で追ふ子頬赤し

初詣 上戸千津子

松籟に押されて登り初詣  
未知数へ向ふ一步や初詣  
七種の香を競ひつつ誰を待つ  
今朝の庭足裏は霜と交信中  
牧場のサイロの高し日脚伸ぶ

☆ ☆

# 季音花

春近し

青木鶴城

雪折や長き道のり負ひしもの  
繚乱を見据へ庭師の寒の内  
權棒に宿るかみがみ寒造  
三界に願ふ安らぎ仏の座  
新たなる柱の傷や春近し

春よ来よ

河野はるみ

伊勢海老のしつぽ木屑に隠しをり  
初風呂の屋根の上より明烏  
買初は葉野菜根物闇魔帳  
月淡く残る岬の野水仙  
水仙や夫婦は別の恋ごころ

屋号

保坂翔太

湯豆腐や杉の香確と利休箸  
平安京を守る叡山冬霞  
竜の玉南総里見八犬伝  
古里に残る屋号や雪帽子  
冬晴や富士がぐぐつと近づきぬ

新年の風景

日高道を

元朝や何事もなき水の面  
初風や沖に置かれし烏帽子岩  
福寿草玻璃越しに会ふ見舞客  
枯菊を焚けば一気の暮色かな  
無住寺に寒九の雨の降るばかり

女正月

笹本啓子

遠景に富士くつきりと淑氣満つ  
割烹着一日忘れて女正月  
盛り上る病談議や女正月  
蠟梅や静かに暮るる能舞台  
蠟梅や節目に結ぶ凶みくじ

遊ぶ影 曲淵徹雄

初東風や湯屋の煙突晴れ晴れと  
麦の芽に遊ばせてみる指の影  
素つぴんで赤城風を迎へ撃つ  
寒波呼び空家の壁に垂るる蔓  
荒磯や冬日を弾く波と風

地球 近藤徹平

雑煮食ふ最中も自転する地球  
注連縄の青き香りや年の市  
ナポレオン空つぽにする年始客  
「百穴」に異界呼ぶ声寒鴉  
寒柝や路地裏めぐる影法師

竜の玉 大塚茂子

鯰起しストープ列車軋みゆく  
鯰起し漁師の妻の胸さはぐ  
胎動の激しきときのくず湯かな  
凍星を母子でさがす塾帰り  
濃き瑠璃の美しき地球や竜の玉

祝 箸 石川理恵

幼子のてこずつてゐる祝箸  
読初や輪廻転生する話  
初電車隣るをとこの京訛  
松取れてすつぴんとなる門扉かな  
寒風を避ける自販機盾にして

二〇二三年 石田慶子

隣り合ふ伊勢海老ちらり大広間  
賀状くる今も夫の名見る不思議  
初バスのてきばき乗する車椅子  
初旅や孫の作りし行程表  
寂しいね郵便受けに問ふ二日

淑氣満つ 野田静香

火に祈る陶芸作家淑氣満つ  
暁や光芒掬きし初手水  
大寒の廻廊黒く光りをり  
雪折や挫折も良しと思へぬか  
氷上に駆け引きの跡ファイギュアかな

ときめき 檜鼻 ことは

一握りほどのときめき冬桜  
天狼や出せし言葉が悔やまるる  
そろそろかもうそろそろね牡丹鍋  
初東風や絵馬へ願ひの志望校  
初東風や骨董市の品定め

白鳥来る 原田 秀子

達磨寺へ続く細道竜の玉  
彼方よりウインク届く冬の星  
日参し遂に目見えしスワンかな  
迷ひ子の白鳥一羽王子待つ  
常連のスワン啄むパンの耳

キークウの天 松島 寛久

初夢やコロナもロシアも獺が食ふ  
福袋寝釈迦も起きる日の始め  
三日はや神が嘘つくキークウの天  
三日の路一村一社の赤ネクタイ  
初東風やビーナズ波に髪なびく

沖行くタンカー 瀬戸 雄二郎

これ以上言へば壊るる薄氷  
相模湾沖行くタンカー春遠し  
だんまりも主張の一つ藪柑子  
今朝一の決断雪の日の寝床  
病院に入り出て来ぬ冬の風

寒牡丹 熊倉 千重子

初参りをなごの禰宜の肅々と  
筆走る賀状一枚手に重し  
初春の沼面に光る陽のかから  
蛇の目さし咲くよはんなり寒牡丹  
団欒のこたつ賑はふ足の数

蠟 梅 宮崎 チアキ

蠟梅や吉を呼び込む鳥の声  
待ち焦がれし慈雨に艶増す実千両  
桃色の稚の臀部や初湯殿  
築百年の床より上る隙間風  
面食らふ家電の故障寒に入る

初山河 葛城 千世子

一幅の水墨画なり初山河  
閉め出され鍵屋を待てり寒の月  
日脚伸ぶすつきりしない心電図  
あたふたと駄まで送り寒の月  
ネクタイを結びつつ乗る初電車

何時の日か 田中章嘉

七草を刻む音たて皆起こし  
何時の日か門松消えて電飾に  
達磨市腹に大きく福の字が  
参道に笑はず猿の一日かな  
寒牡丹芽吹けど焦らす風の中

初鶏 下川光子

初鶏や胸ふくらめて大地蹴る  
鶏のやをら羽ばたく今朝の春  
時の疫の鶏舎静もる寒さかな  
若水の滾る茶室や仄明り  
膝頭そろへて吾子の初茶湯

大櫨 野平 美紗子

大櫨の瘤の顔めく冬木立  
淑氣満つ樹齡千年大櫨  
着飾りし娘集うて淑氣満つ  
蠟梅や夫丹精の庭に咲く  
節約を金言とせる年明くる

初詣 中野 疆

白椿落ちて静かな息遣ひ  
シクラメン我を見てゐる我也見る  
初詣大樹に誓ふことありき  
御屠蘇して平和を祈る朝となる  
採血の針の鋭し年の暮

冬の朝 宮崎 紫水

八百屋から売り声きりり冬の朝  
登校の列のぴりりと冬の朝  
園児バスデザインほのぼの冬の朝  
入居所の手持ち無沙汰や冬の暮  
何事も無きまま過ごし冬一日

大ホール  
後藤綾子

松飾りかけて我家のとのひぬ  
淑気みつ 猷灯煌めく 大師堂  
お正月歩み初む 嬰の土踏ま  
大ホール出でし 新宿あけの春  
かたことと 深夜の 来客嫁が君

角川俳句叢書 日本の俳人100

句集  
**雨滴**  
山西雅子

寄貝の渚に年を惜しみけり

ことばとは、何か。ころとは、何か。  
青空に、海に、春風に注ぐ優しい心情を、  
丁寧なことばで、俳句に紡いでゆく。  
ことばにならない、作者の思いが、  
ことばを通して、伝わってくる。  
季節が、新しい季節の顔を見せる。

主宰誌「舞」創刊後、  
13年間の324句を収める  
清冽の第三句集



定価2,970円(10%税込)  
四六判/上製/184頁  
ISBN978-4-04-884506-9

KADOKAWA

発行：角川文化振興財団 発売：株式会社 KADOKAWA  
お申し込みはお近くの書店かKADOKAWA購入窓口 0570-002-008(ナビダイヤル)へ

特集 「てにをは」で決まる秀句への道

特集 名譽主宰作品競詠

巻頭作品10句

稲畑廣太郎・川井城子・黒田杏子  
田島和生・長谷川 權・日下野由季  
横澤放川・渡辺純枝

# 俳壇

4月号

3月14日発売  
定価900円(税込)

巻頭エッセイ  
能村研三

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句〔第Ⅲ期〕：佐怒賀正美・武藤紀子

連載

俳人の住む町……梶原美邦・谷中隆子  
俳句文法 そのが問題、そのがポイント……井上泰至  
自句自戒……中川雅雪  
名句のしくみと条件……坂口昌弘  
私の本棚・私の一冊……山尾玉藻  
十二か月添削教室……前北かおる

俳句と随想12か月

井上論天・清水和代

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

# 『水明誌』を繙く（水明一月号）

小久保佳世子（街同人）

寒こだまバックミラーに入りたがる 渡辺舎人

枯れの山中をドライブしながらふと感ずるこだまの気配。そのこだまは、バックミラーに入りたがっているというユニークな視点の句です。例えば宮崎駿の「もののけ姫」に出てくる「こだま」のように視覚化された精霊のようでもあります。

思えばこだまは、音の反響を超えて心の領域に繋がるものかもしれません。すべての人に聞こえる、見えるものではなくその声、姿に触れることが出来るのはナイーブな心の持ち主だけのような。

有名な金子みすゞの詩「こだまでしうか」は、「『遊ぼう』っていうと『遊ぼう』っていう」に始まり、「『こだまでしうか』『いいえ、誰でも』という行で終わるのですが、おいてけぼりにされたような寂しさが残ります。

金子みすゞの詩のこだまも、掲句のこだまも擬人化されていてままたらない人恋しさをこだまに託しているようです。

蕭条とした冬景色をほんの一瞬ぼつと温かくしてくれるそんな一句です。

山茶花ひらひら沈黙に耐へ切れず 石川理恵

椿と山茶花は花や葉が似ているけれど、散り方が全く違います。

まるごと花が落ちる椿に比べ、山茶花は花びらがばらばらになってやや風情に欠ける雑な散り方という感じがします。掲句にはその散り方の適当がよく表現されています。

「ひらひら」は桜の花が散る表現としては常套的ですが、山茶花の「ひらひら」には、ひらひらするといった軽さのイメージがあります。

「沈黙は金」とか「男は黙って」とか、沈黙には美徳の面もありますが、時に場を重苦しいものにします。そんな時場を和ませるお道化役のお人好しと哀しみのようなものを「ひらひら」に感じると言ったら深読みのし過ぎでしょうか？

あの人が苦手人参より苦手

同じ作者のこの句にも山茶花の句に通う独自のリズム感と批評性があります。決して重くにはならない配慮があります。沈黙に耐えきれずひらひら散る山茶花は作者自身なのかもしれません。

# 現代俳句鑑賞

## 網野月を

蠅螂の卵囊 活けて春を待つ

中村和弘

〔俳句〕 1月号・卵囊より

「蠅螂の卵囊」とは例のあれである。小学生の頃の筆者は机の中に仕舞い込んで、後で大変なことになったのを覚えてゐる。そもそも「蠅螂の卵囊」は、生け花の素材になるのであるうか。流派によつてはチャレンジ精神の旺盛な方がいらつしやるようだが、果たして実際のものなのであるうか。筆者は勉強不足で未だに知らない。もしかしたら庭先に、「蠅螂の卵囊」のある小枝を小瓶か何かに差し込んで楽しんでおられるのかも知れない。他に「風虐の松を容れたる初日かな」がある。

往診の指は手首に眼は雪に

今井 聖

〔俳句〕 1月号・屏風絵より

脈搏数を数える往診医の視線のやり場に着目しているのである。この雪の降り方が、鼓動の速さに匹敵しているような錯覚に囚われてしまった。他に「見る度違ふ屏風絵の嘴の長さ」がある。

値切りたる新暦ゆゑやや不安

衣川次郎

〔俳句界〕 1月号・新作巻頭3句より

諧諷の効いた句である。今どき「新暦」に狂いのあるものがあるとは思ひもよらないが、「値切りたる」とあるので、さもありません、と納得させられてしまう。そもそも売れ残りの値引きセールは分かるのだが、「値切」つて買う暦などあるのであるうか。すっかり作者のロジックに嵌まり込んでしまったようだ。

初空の呼吸に合はず深呼吸

白土昌夫

〔俳句界〕 1月号・年迎ふより

「初空」が「呼吸」しているというのである。作者は毎朝のように空を見上げながら空の「呼吸」を感じ取っているのではないだろうか。「初空」ならば尚更、気持ちも新たにこの「深呼吸」もさぞ気持ちの澄む思いであつただろう。「初空」の擬人化という構想に止まらずに自然をはじめ人間世界を超えた物事の能動的な行為を認めようとするところにも俳句の領域は存在しているようである。

軍人の勲章 俳人の焼譜

神野紗希

〔俳句四季〕 1月号・巻頭句より

対の比の効いた句なのである。少々揶揄も感じられる一方で、「俳」としても分を弁えろという戒めにも受け取れる。裏返せば、破壊が榮譽となる「軍人」への冷たい目線と「俳人」のお気楽な中にも少々の使命感に似た矜持も感じ取ることが出来る。ただ、「軍人の勲章」は過去への評価であり、「俳人の焼詣」は必ずしも過去だけではなく現在も未来もなのである。他に「海へ剥く蜜柑よ光なら此処に」がある。

### 大冬日パンを抱けば近づき来

(俳句四季) 1月号・葡萄葛より

高野ムツオ

日の南中時刻を大きく過ぎて西に傾きつつある頃の様子かと想像した。わずかだが日は肉眼に大きく見えるようになる。何とも平和な景である。「パン」の香、暖かい日差しを思い浮かべる。この「パン」は長めのフランスパンが好い。出来れば先っぽが紙袋からはみ出ている欲しい。他に「葡萄葛舌に絡ませ東北人」「ヒメムカシヨモギと並び月を待つ」がある。

### 凍蝶の棲む石かぎりなく硬し

片山一行

(俳句四季) 1月号・しぐれるより

上五の「……の」切れ字としての性格も加味されているようだ。筆者は一句仕立ての句として解した。上五の季語「凍蝶」の様子もさることながら、「棲む石」の厳しさを強く表現している。その事で一層「凍蝶」の凄惨な姿が想像される。掲句においては季語「凍蝶」は「石」を修飾するアイテムとして提示されているのだ。他に「小夜しぐれ夢の血中濃度かな」がある。

### 窓秋忌声潜めれば紙乾く 雪原に雪俺たちは一筆箋

秋尾 敏

(句集「百句自解II」より)

本書の自解にもある通り、一月一日である「窓秋忌」の句は珍しい。高橋龍作「終わりなき年の始の窓秋忌」他が所出されているのだが、掲句の座五「紙乾く」に作者と窓秋との関係性が滲み出ている。句の高揚感に窓秋句に匹敵するものがある。

次句の「雪原」と「一筆箋」の対比の大胆さは、一読謙遜のようにも解釈できるのだが、むしろ「一筆箋」にすべてを懸ける潔さを覚える。

### 指太き汝に勤労感謝の日 ゴム長の一人加はり大試験

中西夕紀

(句集「中西夕紀句集」より)

上五の「指太き」から「汝」は職人か農事に従事する方を想像するが、それ以外の人物でも良いのである。句中には他の情報はない。つまりは年季の入った手をした方ということである。元々は新嘗祭の日である「勤労感謝の日」は、決して勤労者への感謝を表す日ではないのだが、生産を祝す心根は掲句における句意と同様なのである。

次句は、最近流行らない「ゴム長」姿の出立を思い浮かべている。それだけに目について、句としても新味のあるものとなっている。と言いつつも最近の「ゴム長」は、黒色と限ったものでは無くてパステルカラーの洒落たものも多くなったようだ。

## 春浅し

寺内洋子

長い人生のほんの四分の一しか住んでいなかった故郷。県内でも雪の多い福井県奥越地方です。

山紫集の兼題「春浅し」に反応してしまいました。低くなつた積雪と石ころ道の間を、軽やかな音を立てて流れる雪解け水所どころ顔を出す土道から覗く雑草の青さ。そう、雪にもめげず青さを保つたまま春を待っているのもあるのです。

雪が降り積もつても子どもにはそれなりの楽しみがあり、退屈したり嘆いたりすることはありませんが、やはり春は春。雪国の春は格別です。暖かい関西に住んでみて感じます。

雪国の春はどつとやつて来ます。裏山を打ち眺め、山吹の黄色、辛夷の白を探して採りに行くのも楽しみの一つでした。あの頃は教室の柱に竹などを切つた簡単な花差しが釘で打ち付けてあったので、山へ行つた翌朝はそれを抱えて登校。先生は喜んでくれましたが、さあ、級友達はどうだったでしょうか。気にしたことはなかったけれど。格別珍しくもない花ですから。でも持つて行くのはほとんど私だけだったような。他の子たちには興味なかっただけかも。これを人は自己満足という？三つ子の魂のように、未だに句会にお花を抱えて行つたりしている私です。

毎月25日発売  
定価1000円(税込)

# 月刊俳句界 2023年4月号

特集

## 俳句の革新者たち

- 松尾芭蕉の革新 復本一郎
- 正岡子規の革新 井上泰至
- 高濱虚子の革新 岸本尚毅
- あなたにとつての俳句革新者は？  
今瀬剛一 坂本宮尾 大井恒行  
奥坂まや 田中亜美 田島健一  
阪西敦子

〈ラビアン〉俳句界NOW 小川軽舟

特別作品21句 三村純也

特集 くちずさみたくなる俳句く舌頭千転

○論考く舌頭千転とは？ 大輪靖宏

○くちずさみたくなる俳句

伊藤伊那男 浦川聡子 関悦史 岡田由季

○リズムで気を付けていること

山西雅子 山本一步 黒澤麻生子 中岡毅雄

北斗賞歴代受賞者競詠

発表！ 山本健吉評論賞

\*セレクション結社「煌星」石井いさお

私の一冊 すずき巴里「ろんど」

対談 佐高信の甘口で「コンニチハ」！

小出裕章（工学者、評論家）

「俳句界」投稿欄 一流選者14名！  
日本一充実の投稿欄



※一部変更の可能性がります。

株式会社 文學の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F  
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

山本鬼之介 選

水明集

障子に鬼と狐鳩来て影遊び  
老齡の恩師住む町十二月  
玻璃窓の曇り拭へば冬夕焼  
寒茜雑木林の影斑  
寒暮かな鴉の低く禪の寺

さいたま 小林京子

新 暦文

谷中坂遠富士染めて冬夕焼  
冬夕焼初めて回る逆上り  
肩書を息子に譲りちやんちやんこ  
日記買ふ我人生に大吉も  
編みかけのセーターほどき恋終はる

手袋のままの握手や上り線  
ポインセチア丸テーブルのティーセット  
大白鳥羽ばたき見せて吾に告ぐ  
枯園や裸婦像の醜顕なり  
忘年会客路地で会ふ恋の端

さいたま 梅澤輝翠

大仏をくすぐるごとく煤払  
故郷のシャッター街や枯柳  
精霊や月命日の帰り花  
冬霧や曙光を浴びて浮かぶ城  
合宿の学生走る冬木道

反町 修

水鳥の水脈が交差し光さす  
障子張り奥座敷までけふの陽を  
冬晴や憂ひ微塵もなきごとし  
空高く鳴く白鳥のシルエツト  
白鳥や純白の花咲くごとく

菅原真理

子の影を冬夕焼が長くせり  
古寺の枯木の真上星流る  
遠吠えのかすかに聞こゆ枯木道  
久方の宿へ通ずる枯木道  
黒セーター買ひ雑踏に紛れ込む

篠崎紀子

湯豆腐に独り語りのつきぬ夜

轍はためく街道筋の北風

筋トレの三日坊主や寒夕焼

取り敢へず酢味噌で和ふる九条葱

追憶の旅は上州冬桜

さいたま 清水桂子

モノクロのフィルムが如何に冬紅葉  
遥かなり聖誕祭の日の戦火  
傍らに隠密のごと冬の蜂

粕汁や残り野菜も香り立つ

度忘れやその名出ぬまま凍星を

平塚 丸屋詠子

母に添ふ稚児の戒名冬日さす

河豚碧し青磁の皿に盛りたれば

苔纏ふ千年杉に初日影

海青し後継者なきみかん園

うすき陽を集めて中に冬桜

池田 珪子

熊谷 越田栄子

つきたての米に小春の温みかな  
衣桁には四つ身の晴れ着小春かな  
背くらべ記せし柱冬ぬくし

冬ぬくし猫の仕草の民芸品

熱に臥しおじやに母の味のしぶ

老いの身の筋トレの部屋白障子

水鳥や風と織りなす波の紋

とつぷりと日暮れて浮寝鳥一羽

異界の人にあらずや夜半の枯芒

入り日急里曲の家の干大根

越谷 阿部幸代

さいたま 山岸久美子

残照をさらり浮かばせ冬の川  
夕暮れの原野一条冬の川

寄せ鍋や百話飛び出す母百寿

地が支ふ千年杉や冬の空

川べりをたどれば和む枯芒

水洶るる鴉の歩む心字池

啖呵売のど飴舐むる札納

あてのなき散歩の先に冬木立

マスク取るその唇に紅眩し

独り身の足より寄する湯ざめかな

さいたま 元田亮一

本橋稀香

冬空の銀杏粲粲王の如  
かはたれは手負ひの武者に枯はちす

花八ツ手指開き撮る骨密度

病室を仕切るカーテン隙間風

主婦の手に輪ゴム食ひ込む冬至風呂

冬夕焼手術中なる赤ランプ

さいたま 渋谷きいち

かたことと朽ちし巢箱の枯木道

築山に伍する身の丈枯尾花  
海山の暮色に映ゆる枯すすき

伊奈 菅原卓郎

裸木やいま晩学の「明治維新」

ふゆの朝霽筋のこす渡し舟  
湯豆腐や苳まで熱き友の情

セーターの背に忍ばせて赤きばら  
軍鶏鍋を食うて五鉄の吉右衛門

河豚雑炊ポン酢に噎するをんなかな

頬杖の啄木坐像冬の霧

染谷風子

月光に黒く輝く枯木立  
枯木立夕陽が射して阿修羅像

さいたま 新井孝磨

今も唄ふ「異国の丘」よ寒波来る

兄弟はいつも揃ひのカーデガン

御迎へは紫の雲日向ぼこ

吉と出て神籤を結ぶ年の市

深谷葱剥けばしたたる白さかな  
仲見世に買ふ桐下駄や年の内

五条の橋の弁慶のごと枯木立

上尾 横山君夫

冬霧の覆ひかぶさる山陰道  
鴨川に鴨の群るるや二条城

千坂平通

外商部に檄とぶ日々や年の内

結納の水引光る冬座敷

鳥沈むほどに撓わや伊予蜜柑

雪舟の墨絵に惹かれ雪国へ

威勢よき声を浴びつつ年の市  
平熱に戻りし朝の七五三

冬霧や千代の都の東山

さいたま 西幅公子

解体の進まぬ空き家師走かな  
凜として散り急ぎせぬ冬桜

岡田宣子

群るる魚にせまる鯨の包围網

星屑を従へ光る天狼星

白鳥の飛び立つ音や生くる音

鬼の衣に怯え騒ぐ子里神楽

シニアカートの坂一步づつ息白し  
さいたまにまさか白鳥来るなんて

里神楽締めてととのふ婚儀かな

交番の霞む赤灯冬の霧  
引率のガイドの旗や冬帽子  
年の瀬や迎車連なる繁華街  
歓迎の看板文字に夕時雨  
寒波来ぬ鳥居の注連の新しさ

さいたま 村杉清吉

冬霞民話の里をすつぽりと  
古利なる風情を醸す枯柳  
冬の日や散歩を急かす午後三時  
北窓にもつこり眠る男体山  
筑波嶺の稜線なら冬霞

さいたま 加藤でん治

朽ち果てし小舟の櫂や冬芒  
山里に独り住まひの婆の冬  
風見鶏冬の神戸の客思かな  
借景の向かうに山や冬の庭  
浅草に客足戻り年の市

野村美子

野仏の目を細めある時雨かな  
夕しぐれ箱根細工の技さぐる  
着ぶくれの吾を句会へ子の車  
迫りくる老いを祓ふといふ茸  
菩提寺に仏画奉納せし小春

杉戸 佐々木史女

寄鍋のれんげ並びて客を待つ  
追ひつけぬ此の悲しみや冬の川  
山雨来て漆黒迫る冬の川  
冬の川大地のむくろ喰うてをり  
冬日さす主なき部屋の地球儀や

川口 新井のり子

梵鐘の幽かに流れ返り花  
マフラーにあの日の記憶戻りけり  
手袋やすんなり事の片づかず  
炎上げ放歌高吟河原鍋  
煤払ひ眼鏡をかけて今一度

伊予 向井章子

武蔵野の疎林を透かす冬夕焼  
谷川岳を望む盆地や冬夕焼  
裸木の秀のびやかに青き空  
画帳小脇の日曜画家に枯木立  
やつちや場の早朝のせり黒セーター

さいたま 霜多光代

機嫌よき厨の響き千六本  
味噌蔵の酵母いきづく冬田風  
敷石は母の歩幅に花八手  
人影の絶えて冬田に雨しとど  
おでん屋の焦げし菜箸ビル谷間

さいたま 森美枝子

幾重にも稜線染むる冬夕焼  
愛憎の極致を読むや一葉忌  
人気なき仮設住宅冬夕焼  
冬夕焼瓦礫に滲む血のごとく  
閑の檻に荒ぶるシベリア虎

さいたま 皆川更穂

息白く日の出を待つや白馬山  
隅田クルーズ水鳥しかと我を見る  
十五羽の白鳥集ふ越辺川  
青空へ大白鳥の大助走  
冬晴のしまなみの橋ベダル漕ぐ

さいたま 森下美智枝

掲示板昨日三羽と白鳥来  
柚子をもぐ選んで大をお福分け  
冬晴や飛行機雲のただ一本  
冬晴や富士借景に源氏道  
客膳を磨き迎ふる年男

竹澤和子

筋通す男鰈や寒卵  
はふはふと咽すべりこむ湯豆腐よ  
寸又峡ジビエに添ふる枯薄  
河川敷隠るる所なき枯芒  
一声も出さず跳びゆく寒鴉

飯田忠男

みちのくへ出向く托鉢冬うらら  
冬晴の土手にアロエの咲きほこる  
花咲かぬ枯園に皆外方向く  
白鳥と太公望の背に陽射し  
飛び出せぬ瘤白鳥よ白褪せし

小川洋子

小さき庭光集めて冬桜  
冬桜老舗の甘き玉子焼  
天狼の奇しき光朱雀門  
旅の宿柚子湯に浸る冥加かな  
天狼や幽かに響くトランペット

綿貫ひさの

草野球日暮に追はれ秋の行く  
逝く秋や黄昏に立つ古き城  
行く秋の耳に残りし二胡の音  
並ぶ鉢ひときは光る万年青の実  
おもとの実青き空へと紅放つ

後記朝香

廻らねば木の実にもどす木の実独楽  
僕好きよ言つたポトフを煮込み冬  
馥郁と住む家に咲く帰り花  
暮れ際の光とらへし返り花  
白鳥の万羽眠れる月の湖

古池恵里子

夕映えや熱爛に合ふ葉缶買ふ  
冬晴や三味弾き唄ふ葉売り  
故郷は何処も更地や枯野原  
行軍の思ひ出悲し大枯野  
風邪ひきの急に弱腰遜り

さいたま 山戸美子

天狼や三峰山と響き合ふ  
天狼や星の生涯物語る  
冬桜七本の山白し  
冬桜二度の喜び与へたり  
沼風やメタセコイヤの落葉満つ

さいたま 小駒さち子

雪時雨老舗女将の気働き  
空気諸とも詰め放題の蜜柑山  
しめやかに偲ぶ法事や年の内  
仲見世の張子の干支や年用意  
お神楽の平和を招く笑ひかな

春日部 諏訪サヨ子

駅前前の街角ピアノ早やクリスマス  
春日野に鹿鳴く声や茜空  
「大掃除」と曆に記す年の内  
二人分の蜜柑を提げて母見舞ふ  
人気なき平城京に風花舞ふ

草加 外村紀子

平城京朱雀吹きぬく風寒し  
みかん取るべからずの札東海道  
照焼の魚で一献冬の膳  
束の間の陽の移ろひや枯木立  
十年は長し五年の日記買ふ

仲田利子

浜風に戦ぐことなく石路の花  
熱爛や旨さ沁み入る寄席話  
一隅に仕事納めて仰ぐ空  
サッチモの声に抱かる聖夜かな  
あの人も今年逝きしや日記果つ

さいたま 岡田芳春

初恋のやうに道往く十二月  
おでん屋に愛と憎しみ湯気上がる  
お揃ひに着膨れ無人店舗入る  
クリスマスサンタのやうな愛何処  
愛憎やポインセチアを憎みたり

さいたま 吉川拓真

背を向けて歩み去るかに冬木立  
時ならぬ光の花や冬木立  
水底の眠りを包み初氷  
どこまでも凍れば歩いて行けるのに  
消ゆるなら割つてしまおう蟬氷

東京 山中いちい

熱爛や吾の耳たぶをつまむ君  
熱爛や寡黙な父を饒舌に

灰色の街に染まらぬ石路の花  
独り身の悲喜の諸刃や石路の花  
石路の花段差の憎き松葉杖

さいたま 橋爪さなえ

シリウスや亡き人歌ふユーチューブ  
裏通り天狼照らす八卦置  
武蔵野の櫛の彼方天狼星  
冬桜童女ぼぼんと駄ピアノ  
テルモスのお茶を二人で冬桜

さいたま 横山礼子

冬の虹苦しまぎれの嘘ひとつ

住み捨ての庭に侘助五・六輪

北吹くや心の棘を払ふごと

スクラムの腿の太さやラガーマン

一ミリの差の明暗やワールドサッカー

小山あつ子

湯浅 和

冬うらら檻のライオン大あくび  
冬木立幹に巢穴のあらはるる  
凍つる夜の欄間の透くる奥座敷  
晩酌に酔うてごろ寝の炬燵かな  
冬木立はばたく如く少女像

鷹匠の腕に重たき爪の主

沈黙のボールの園児聖夜劇

得意気にざくざくざくと霜柱

風うけて漕ぐ登り坂姫椿

膝に乗る孫の重みやクリスマス

寺町知子

和歌山 嶋田洋子

大晦日呼べど応ふる人の無き  
達筆の「おでん有ります」寺の前  
初氷ひよいと飛び越え散歩犬  
着ぶくれてエレベーターを見送るや  
昨日より明るい仏間ポインセチア

小雪の浅間の山や白まみれ

西の市手締め音や高々と

取りあひし具材も今は一人鍋

頬杖の顔が並ぶや掘炬燵

セーターの袖を伸ばせばぬくぬくと

奥山粉雪

川崎 鈴木玲子

しやわしやわと人參洗ふ山の水  
霜の夜や母の臍脂の羽織ふつと  
赤鳥居数へつつゆく七五三  
訛とび交ふ大鍋のけんちん汁  
シチリアーノ流るる路地の聖夜かな

熱爛や卵溶かして夢心地  
天狼星嗥りて宙を制したり  
天狼星流星の群れ放ちけり  
雲消えて遙けき峰や冬桜  
海越しの小さき不二山冬夕焼

さいたま 秋谷風舎

石露咲くや終活旅行は地元にす  
冬夕焼シャッターチャンス逃しけり  
初しぐれ菅笠かぶる陶狸  
和歌浦のいつもの眺め朝時雨  
みどり児の目玉ぱちくり大根焚

和歌山 高橋満耶子

皿洗ふ微かな音や冬至風呂  
聖樹また飾りレノンを口ずさみ  
さわがしき師走を余所に芝離宮  
ゆく年や二条貫く飛行機雲  
二杯目も幸せ願ひ晦日蕎麦

石関六弦

冬怒涛サムライブルーの涙散る  
蜜柑剥く皆既月蝕欠け始む  
研ぎ上げし薄刃の薄さ葱つり  
平和てふ日溜りに咲く冬菫  
見沼田はセビア真つ赤な寒椿

さいたま 綿引まりこ

咳込みて幸せの種こぼしけり  
図書館の窓のくもりや十二月  
山峡に咳こだまして日のくるる  
掃除機の吸込みあまし十二月  
七輪の魚の香りに咳込みぬ

山下ユリ子

ときめきが早鐘のごと寒の紅  
トンネルを出れば仙台雪催  
「SL銀河」終ふるを惜しみ里神楽  
連山白し裾野を渡る里神楽  
最後のページ繰る指止むる虎落笛

吉川 杉浦理恵

音もなき雨に明るき石露の花  
裏庭へ飛石八つ石露の花  
花石露や行き届きたる庭手入れ  
行く年や壁に貼り足す火伏札  
年送る志すもの今もなほ

森 和子

大木の下で明るき実南天  
氣候変動右往左往のラッセル車  
酔ひ潰れ終着駅は寒の月  
七輪で鍋焼うどん戦中派  
冬空に覚ます興奮座興の宴

さいたま 鈴木藻好

一本の裸木染むる冬夕焼  
冬夕焼赤子背負ひて子守歌  
朝日受けつんと突き出る葱の畝  
畑中の葱に夕日の透き通る  
冬の雲街路樹の中人急ぐ

さいたま 石浜悦子

宅配の到着祈るサンタかな  
動画見て作る聖菓や十三歳  
バー横の聖樹煌めく午後七時  
人影のない登山道雪明り  
畑には密に並んだ姫キャベツ

さいたま 鈴木敦子

根深葱泥に塗るる白さかな  
葱刻むリズムに乗りて香り立つ  
袖子の湯に思ひの丈を沈めをり  
冬至の日丸い南瓜と格闘す  
夕間暮れ銀色にゆれ枯芒

東京 柳父はる

葱苦しなくてはならぬ白と青  
遊び終へ帰る背中を冬夕焼  
日差し受くねぎ青々と育ちけり  
仲間との冬旅程の無謀さよ  
数へ日ややたら何でも買ひそろへ

川島夕峰

賛美歌やチェロの響きに癒されて  
クリスマスケーキの色は国旗色  
異星より来たる技なり姫キャベツ  
せはしさも聖樹飾りて一呼吸  
園長のサンタ登場笑みの渦

さいたま 小田美智

洗濯物ゆるりとたたみ冬ぬくし  
苛立ちも背から抜けし冬暖か  
冬ぬくし玄米炊ける間の眠し  
昼飯のおじや三昧二キロ減  
主役より締め雑炊人気あり

緒方みき子

葱刻む友の転職板につき  
清貧や妻は静かに葱刻む  
ざぶざぶと男料理の葱洗ふ  
夕空に富士どつかりと冬至かな  
託児所へ急ぐ母親暮れ早し

染矢峯雄

枯園に陽の射し二羽の雀かな  
メモ書きを見つつ買物十二月  
友と食ぶケーキきらきら十二月  
我咳込みて教室のざわつきぬ  
咳払ひして壇上の教師かな

高原和子

窓側の列車の席や冬景色

さいたま 武田重子

山茶花や庭に絨毯ピンク色

人知れず弁天池の冬桜  
強風に耐へて満開冬桜

さいたま 樋口元美

波立つや秩父夜祭人に酔ふ

握る手の解けて祈るクリスマス  
鼻つーん耳きんとなり天狼星

返上の酔生夢死や年の暮

年の瀬や酔ひ止め飲んで夜行バス

果てのなき闇に煌々天狼星

サッカーで世界を沸かす十二月

和歌山 南條さわゑ

年の瀬や友との会話早口に

冬日向午後のまどろみ猫男子  
静寂の淀にちりばむる冬灯

大阪 飯塚智恵子

冬青空飛行機雲の三筋四筋

つぎはぎの婆の前掛け実南天  
柊の花はこぼるる猫の鈴

冬紅葉フードバンクで心暖く

日脚伸び散歩の歩幅増えにけり

雨の森お伽ばなしの冬灯

ギター背に初老の男星月夜

藤 沢 小島喜代子

娘の作る料理はアトクリスマス

のべおくり柩に一枝冬桜  
シリウスやイルミネーション招き入れ

さいたま 糸井しるく

柚子風呂や心の皺までのばしたり

子や孫とむかご御飯のベースデー

ヘルシーなすいとん旨しと令和の子

着ぶくれてよちよち歩く一歳半  
芋茎剥く指の渋黒指紋浮く

更くる夜に切絵の世界枯木立

さいたま 鳴海順子

不思議なる冬夕焼の空の色

お迎へを待つ子に山の日短か  
幾千の蝶か銀杏の枯葉舞ふ

鬼石 榊原聰子

鬼柚子のあるテーブルや冬夕焼

冬夕焼九十を越えたとメールあり

吉日に蜜柑着くよと電話する

咳こみて白湯一碗を枕元  
高枝に大きな柚子のありしかな  
冬木立八高線の音近し

羽ばたいて小鳥とまどふ初氷  
色づいて金柑のつぶたれ下る  
水仙のほのかに香る仏間かな  
袖子もらひ一人暮しの袖湯かな  
山に来て独りながむる冬桜

鬼石 加藤ナヲ子

薄口の醬油ゆかしき切干煮  
赤嘘に騙された振りクリスマス  
聖樹の灯消ゆれば二拍の後とぼる  
賜りし恩を指折り冬銀河

大阪 遠藤人美

年末の実感乏し施設では  
短日や何かをするとすぐ夕日  
句会閉づ我の苦界の暮となる  
深谷葱送りし人は一〇一歳  
精一杯飾る施設や年の暮

さいたま 川村 治

学童の登校の列息白し  
大黃落ビルの間の菩提寺は  
思ひ切り抗ふ幼冬紅葉  
水鳥の群れてウイーン朝の沼

宮代 関谷多美子

円安に泣くも笑ふも山眠る  
目を閉づる田舎へ続く雪あかり  
餅つきは歌やあひのて杵の音  
大漁や波頭の先に石路の花

草加 持永喜夫

行く年や微光の外にLED  
石露の花黄色に可愛い目の保養  
男体山念じて迎ふ行く年に

さいたま 落合和枝

書かずとも何はともあれ日記買ふ  
あといくつ指折り数へ芋煮鍋  
鯛焼を腹からがぶり娘あて  
ひとひらの雲の行方や冬の朝

東京 畑宮栄子

ガムの味ゆつくり消ゆる涅槃西風  
愁ひごと吉野の紙に雛納め  
一瞬の恩師の泪霞草

所沢 関根千恵

断捨離の若き写真や冬ぬくし  
冬ぬくし一期一会の骨董市  
手をつなぎあんよは上手冬ぬくし  
冬ぬくし窓際に席すすめられ

飯室夏江

紅葉散る過ぎし時をも色づきて  
部屋中がパンの香りや冬紅葉

さいたま 鈴木香音子

中学の旧き歌本年の暮  
娘の如く歌ふご婦人クリスマス

藤沢 藤田寛二

## 作品評

### 山本鬼之介

障子に鬼と狐鳩来て影遊び 小林京子

殆どの人に、子供の頃に親が手を使って演じてくれた影絵遊びの思い出があるのではと思うが、この俳句はまさにその体験を想起させてくれるものである。部屋の電灯を消し、部屋の外にいる親が両手を使って模した動物の形を懐中電灯などの明かりを用いて障子に映し、その影を部屋の中の子供が見て驚き喜ぶのである。犬や狐、そして鳩など、鳥獣の形を手と指を組み合わせて作り、恰も本当の動物がやって来たかのように見せるのである。熟達すると、驚・白鳥・兎・蛙・蛇・猫・葉缶など、いろいろなものを映し出すことが出来ると言う。作者もきつと子供時代を懐かしみ、自分の子にも見せたのではなからうか。御負けに鬼が登場したことで、一段と中身の濃い俳句になった。

編みかけのセーターほどき恋終はる 新 曆文

淡い恋心が次第に形を表してきて、自分の心の証として彼に手編みのセーターを贈ろうと心を込めて製作に勤しんでいた。しかし、そんなひたむきな女の気持が実らず、破局を迎える結果となった。完成間近のセーターの毛糸を、少しずつ少しずつ解いてゆく女心の切なさに、抑えようとする涙が止まらない。作者の身近にモデルとなったひとが居たのだろうか、迫真の作品である。

枯園や裸婦像の醜頭なり 梅澤輝翠

公園の台座に横たわる裸婦像か。桜花盛んな春、緑濃き夏、そして、紅葉の秋が過ぎて木木が葉を落とした冬となり、園内が物寂しい景色になった。来園者の目に潤いを与えていた裸婦像が、作者の目には醜悪な物体と映ったのである。それは、風雨に曝され薄らと土埃を浴びていることもあるが、それ以上に周囲の景観からくる作者の心の作用によるものではないか。

冬霧や曙光を浴びて浮かぶ城 反町 修

俳句の文体から想像して、山上にある城を思い浮かべる。現在の兵庫県朝来市和田山町竹田にあった竹田城がこの句のモデルではないかと思われる。「天空の城」とよばれて有名になり、発生する川霧に包まれる城址の石垣群が幻想的な景

観を成し、観光者を魅了する。折からの日の出の光を浴びた城址に、数百年前に現存していた山城が屹然と建っているように思えたのであろう。人心を操る冬霧の成せる力である。

### 障子張り奥座敷までけふの陽を

菅原真理

冬の障子張り替へは、想像以上に難儀な作業である。古びた障子紙を丁寧剥がして障子の棧を水洗いし、乾かしてから新しい紙を貼る。貼り終えて見回した時の満足感を楽しみに、黙々と作業するのである。真新しい障子紙を透した冬陽が、奥まった座敷にまで入ってゆくような実に清々しい気持ちに充たされる。

### 黒セーター買い雑踏に紛れ込む

篠崎紀子

近年男女共に黒やダークグレーの服装が増えたと思うが、これは世界的な傾向なのだろうか。作者も筆者と同じ思いなのか、某日黒のセーターを買って早速街に出た。別段他人の目を避ける必要は無いのだが、外敵から身を護るための動物の保護色のように、黒セーターを着てほっとした気持ちになったのだと思う。「紛れ込む」がその時の心理状態を物語っているようだ。

### 湯豆腐に独り語りのつきぬ夜

清水桂子

鍋料理とは違って、湯豆腐は二人（特に男女）が鍋を間にして食すことでよき味わいが生まれるものかと思うが、独り鍋となるとどのような雰囲気になるのだろうか。その疑問を掲句が解いてくれた気がする。ご夫君が存命の頃、よき世話女房ぶりを發揮して湯豆腐鍋を共にしたことを想い出し、一人二役を演じながら湯豆腐を食べている作者なのである。楽し気でありながらちよつぴり泣かされる俳句である。

### 河豚碧し青磁の皿に盛りたれば

池田圭子

青緑色の釉の色が、ごく薄く切られた「てっさ」（主に関西で言う河豚の刺身の異称）を透して見えているのである。ただそれだけのことを述べている俳句であるが、青磁の皿と河豚を取合わせることによって、河豚料理の高級感を演出する内容豊かな俳句になっている。作者の技の冴えと言えよう。蛇足ながら、むかし勤め人の頃、山口県の旧・徳山市の料亭で顧客を接待した時、ぶつ切りの河豚刺しが出された。びつくりして客に訊いたら、徳山は河豚の水揚げが多い土地なので、大阪や東京のような上品な食べ方はしない、と説明され納得した。

### 異界の人にあらずや夜半の枯芒

阿部幸代

野や河原で風に揺れる青々と茂った夏の青芒、月光に映し

出された秋の穂芒、それに引き換え冬の枯芒は実に淋しく憐れである。臍げに見える夜の枯芒には存在感が無い。「異界の人」とは、なかなか上手い表現である。

あてのなき散歩の先に冬木立 元田亮一

人によって、また、その日の状況によって散歩の仕方も違ってくる。毎日決まったコースを決めた時間に散歩する人と、その日の気分であちらこちらを歩き回る人など様々である。この俳句の散歩人は後者で、ふらりふらりと歩いていたら、句材にぴったりの冬木立に遭遇したということだろう。一般人にとっては特段に感じることもないものであるが、俳句を嗜む者にとっては、季語の見本のような冬木立に出会えたことで、その日に三重丸を付けたい気分になったのだと思う。

傍らに隠密のごと冬の蜂 丸屋詠子

隠密は、密偵・忍びの者・間者と同意であり、南北朝時代に起こり、江戸時代は伊賀者・甲賀者としてこの伝統が引き継がれた。隠密はその字の通り正体を隠し、ひっそりと人に悟られることなく任務を果たさなければならない。

冬某日、気がついたら自分の傍らに季節外れの蜂が止まっていた。動きが鈍く羽音も立てずその場を離れようとしないうちよっと気味悪いが慕われているようでもあり、追ひ払うこ

となく暫く観察していた。

衣桁には四つ身の晴れ着小春かな 越田栄子

例えば、加賀蒔絵の衣桁に加賀友禪の着物を取り合わせるのと非の打ち所の無い景になるが、幅のある衣桁にこじんまりと子供に着物が掛けられているのも一興である。季語から判断して当然のこと七五三祝しめい、いわいの晴れ着で、三歳か七歳の女の子の衣裳であるが、若しかすると姉妹揃いの祝かも知れない。

寄せ鍋や百話飛び出す母百寿 山岸久美子

百寿を迎えて今なお健啖で、お口も達者なご母堂である。寄せ鍋の具を口に運びながら昔話が途切れず、家族から『食べるときは話さないで』と注意される。それでも収まるものではない。『やれやれ』と、家族は苦笑するしか手はないのである。卒寿はおろか百寿を迎えるのも珍しくない長寿の時代となった。

かたれば手負ひの武者に枯はちす 本橋稀香

秋の敗荷がさらに惨めな姿を晒しているのが枯蓮である。丸く大きな葉を水面に出し、夜明けに大きな花を咲かせる夏の蓮とは思ってもよらぬ惨めな姿である。枯蓮を、疵だらけの甲冑に身を包み、槍を杖にして足を引き摺り歩く敗残の武者

に見立てた作者の眼力と、「かはたれ」の効果を評価する。

### 軍鶏鍋を食うて五鉄の吉右衛門

洪谷きいち

筆者が「時代劇専門チャンネル」で毎日のように観ている「鬼平犯科帳」の軍鶏鍋屋「五鉄」の場面は、自分も密偵の一人として加わりたくなるような魅力を持っている。作者も同じなのだろう。軍鶏鍋をつつきながら、気持は吉右衛門に成り切っている。幸せ幸せ……。

### 仲見世に買ふ桐下駄や年の内

染谷風子

正月三が日を和服で過ごすのか、初詣に出掛ける下駄を新調しようとの心積りが窺える。靴の店は地元の街にもあるが、下駄を商う店は特定の場所に行かないと無い。その目的に、浅草の仲見世はびったりだし、むかし懐かしいプロマイドの店をのぞいたりして年末の活気に満ちた浅草を満喫したのである。作者の得意顔が見えてくる。

### 島沈むほどに撓わや伊予蜜柑

横山君夫

瀬戸内の小島にある蜜柑畑を想像する。旧国名伊予すなわち現在の愛媛県で蜜柑の生産が始まったのは江戸時代の終り頃とのことで、一年を通じて気候が温暖で地質が蜜柑の生産に適していることで蜜柑の生産量は和歌山県に次いで全国二

位とのこと。上五から中七の文言が、伊予蜜柑の最盛期の景色を物の見事に表している。蜜柑と共に伊予柑が名高い。

### 白鳥の飛び立つ音や生くる音

西幅公子

大型の鳥である白鳥が飛び立つ時、「ばさばさばさ」と大きな羽音を発して水面を走るが、まるでジャンボジェット機が離陸する時の光景に似ている。湖面を離れて近隣の餌場へ向かうのだろうが、飛び立つ時の音を生きたための音と表現したことで、非凡な白鳥俳句に仕上がった。

### 湯豆腐や芯まで熱き友の情

菅原卓郎

友人と湯豆腐鍋で酒を飲んでいる。話が弾み酒が進む。昔の想い出話から近頃の世情や海外の話題まで話が尽きない。単に気が合うということだけではなく、自分の身に何か問題が生じた際には、親身になって相談に乗ってくれるという確信が持てる人物である。湯豆腐の豆腐が芯の芯まで熱くなっているように、親友の心の熱さを確信している。

### 月光に黒く輝く枯木立

新井孝磨

昼間の明るい時の枯木立は閑散として淋し気であるが、皓皓たる月光を浴びて、日中とは別物のように存在感を示している。「黒く輝く」に作者の思いが表現されている。

## 水琴窟

(水明集一月号鑑賞)

### 池田雅夫

秋郊の遠き煙や登り窯 小川洋子

町から遠く離れたところに陶磁器を焼く窯があるのだろう。「登り窯」は複数の窯室を丘陵などの斜面に階段状に築いたもの。秋の郊外ののどかな風景がうかぶ。掲句は「遠き煙」に昔の暮らしを懐かしみ、登り窯の趣を充分に味わっている。

道祖神をしつとり濡らす秋時雨 竹澤和子

「しつとり」には、湿り気をふくんでいるようすの他に、落ちついても静かなようすを表す意味がある。思慮深い表情の「道祖神」が「秋時雨」に濡れて黒みを帯びた顔や肩などに生氣を感じたのだ。「しつとり」が絶妙に双方にかかる。

亡き母のぬり絵を壁に秋の声 加藤でん治

高齢社会といわれる昨今。デイサービスなどでは利用者のリハビリを兼ねて「ぬり絵」などが行われている。生前に母が描いたぬり絵を部屋に飾っているのであろう。見るたびに母の声、口ぐせが蘇ってくるのだ。「秋の声」となって。

行く秋やメトロノームの鈍き音 綿貫ひさの

「メトロノーム」は音楽の拍子の速度を計るもので、振子の原理を応用したもの。「行く秋」のものの寂しさと、メトロノームの「鈍き音」に冬の気配を感じているのだろう。

窓越しの母に对面万年青の実 秋谷風舎

コロナ禍にあつて、施設に入居している人や入院をしている人などに面会することもできない。仕切られた部屋のガラス窓越しに母と会うことができたのだ。珊瑚玉のように赤い「万年青の実」に母の快復を願っているにちがいない。

秋立つやえいと蹴り上げ逆上がり 鳴海順子

暑さが続く中、それでも「秋立つ」と聞けば自ずと体が動くのも心情である。公園での風景であろう。もし仮に「逆上がり」をしているのが本人だとしたら……とても信じられない。元気な児の姿を詠んだものとしておこう。愉快！愉快！

初春の小江戸の鐘ののんびりと 関根千恵

「小江戸の鐘」といえば、川越の「時の鐘」を思い浮かべらる。旧暦での「初春」は新年のこと。無事に新年を迎えられた安心を慶び、泰然と過ごしている。折しも時を告げる鐘の音が「のんびりと」しているように聞こえたのだ。

金箔を纏ひて月の出でしかな

小山あつ子

四季の中でもっとも大気が澄む秋は、月のさやけさも加わり「月」といえば秋をさすのである。中でも仲秋の名月は十五夜の月として祭られる。大きく金色に輝くように昇ってくる「月の出」。「金箔を纏ひて」に莊嚴さが表れている。

天空の透けたわわなる梨畑

石浜悦子

東京近県ではそれぞれに梨の栽培が盛んで、埼玉県内には「武州梨」がある。梨畑の棚は作業しやすいように大人の背丈ほどの高さに調節されている。たわわな梨に日を当てるために葉を間引くという。「天空の透け」は実景であろう。

卒寿迄歩くと決めて草紅葉

南條きわゑ

秋草の色づいた道を歩くのが日課のようだ。卒寿までは、もう数年ある。それまで元気でいようと心の励みにしている。可憐な草花を発見し楽しみが増えてゆく。それを俳句に詠む嬉しさも加わる。「卒寿」と言わず、ぜひ百寿を目標に。

脚立より鉢を伸ばす冬仕度

鈴木藻好

伸び放題の庭の木の枝をほらい、霜除をするなどの「冬仕度」「冬構」に余念がない。高いところの枝は脚立を使う。軽快な鉢の音が聞こえる。ただただ怪我のないことを願う。

石仏の貌柔らかき秋の晴れ

山中いちい

「石仏」からは堅い表情を想像するが、秋の日射しを浴びて「貌柔らかき」に見えるのだ。半眼の石仏は、見るとなく見ないともなく悟りの境地なのかも知れない。石仏を見ている人の心そのものが「石仏の貌」に写しだされるのだろう。

「海はなぜ青い」と問ふ子雁渡る

橋爪さなえ

「雁」は秋、北方から渡って来て冬を越す。水深の浅い湖沼や湿地に生息する。はるばる大陸から海を越え渡って来た雁。子の素朴な疑問に、「雁渡る」をたとえにだして答えに結びつけたのだろう。そして、子の成長を楽しみにしている。

畦道や金波貫く曼珠沙華

飯塚智恵子

「金波」は日光や月光などが映って金色に輝く波のこと。畦などに植えられている「曼珠沙華」の鱗茎には毒があり、もぐら除けとしても植えられる。群生する曼珠沙華の花は赤色が多いので、金波はむしろ稲穂波であるように思う。

白菊や手向けて思ふ母のこと

橋本忠夫

供花として代表的な「白菊」。その白菊を「手向けて」、ありし日の母を思い返しているのだろう。命日であろうか。遺影の母はいつも微笑んで見守っていてくれるように思う。

網野月を選

山紫集

老舗の庭の狭くなりしも冬桜

今生のたましひの色冬ざくら

冬桜シャンパン色の女坂

花咲爺隠るる木陰冬桜

梅澤輝翠

梅澤佐江

加藤でん治

保坂翔太

以上特選

冬桜鯉は悠悠川上る

南條きわゑ

銀座街つひと見上ぐる冬桜

畑宮栄子

冬桜きりんの舌の長きこと

石田慶子

上州の風に会釈を冬桜

原田秀子

冬桜抜けゆく風の投げキッス

菅原真理

ひつそりと二度咲きするや冬桜

樋口元美

逆光に浮かぶ横顔冬桜

曲淵徹雄

冬桜空の近くに咲きにけり

日高道を

車酔を癒す峠の冬桜

森美枝子

一握りほどのときめき冬桜

檜鼻ことは

くちびるが好きとかすかに冬桜

渋谷きいち

冬桜佇む人の影うすき

福田千春

冬桜疎に咲いて人嫌ひ

藤澤喜久

ひそと咲き小さき小さき冬桜

森下美智枝

冬桜もはや亡夫の貌おぼろ

正木萬蝶

楚々と咲く姫路城下の冬桜

森本早苗

冬桜ポニーに乗りたき子等の列

町野広子

吉日に結ぶ縁談冬桜

山田美佐尾

花びらに憂ひはつかや冬桜

松井由紀子

冬桜ロダンの群像吐息せり

山中いちい

首塚や人恋しげな冬桜

松宮保人

暮かかり宵の明星冬桜

湯浅 和

犬つながりの名知らぬ人と冬桜

丸山マスマ

つつましく庭隅守る冬桜

横山君夫

冬桜母は施設に入居せり

宮崎紫水

母に似た背中目で追ふ冬桜

横山礼子

道の辺の幽かな香り冬桜

宮崎チアキ

長生きも三文の徳冬桜

青木鶴城

晩学の窓から見ゆる冬桜

元田亮一

上州の風の飛沫や冬桜

秋谷風舎

仰ぐたび紛れてしまふ冬桜

本橋稀香

傘寿超え色薄らぐや寒桜

新 暦文

冬桜ふたりで見付く散歩道

森 和子

冬桜猫と老爺の日向道

阿部幸代

われ独り語りて答へ冬桜

森川義子

冬桜昼のぼんやり月が好き

新井孝磨

冬ざくら黒塀を守る七代目	荒井俱子	冬桜風研ぎ澄ます空の青	大場順子
露光る苔に明日寒桜	飯田忠男	市民ホールの裏手にひつそり冬桜	岡田宣子
散り際に少し紅見せ冬桜	池田珪子	薄墨の空に似合ひの冬桜	奥山粉雪
羽衣の風の間之間に冬桜	池田雅夫	料亭の評判となる冬桜	川村 治
添乗員に恵まれし旅冬ざくら	石川理恵	咲き満ちて淋しさ少し冬桜	熊倉千重子
冬桜町騒遠く半生を	井関礼子	別れとは言の葉乏し冬ざくら	河野はるみ
冬桜夕日の中の車椅子	井上燈女	冬桜句碑凜として輝けり	小駒さち子
愛犬と伊豆の湯宿や冬桜	井口俊晴	浅間嶺のうつすら白し冬桜	越田栄子
廢屋に添うてひつそり冬桜	上戸千津子	修道院の戒律凜と冬桜	後藤綾子
咲きはじむ妻のおもかげ冬桜	宇田白鷺	冬桜異なる時を生くる人	小林京子
未来から過去に咲き継ぐ冬桜	内田恵子	疎開児の焦がれし母や冬桜	近藤徹平
今もなほあの日の記憶冬ざくら	大塚茂子	ふたたびのチャンスのあるや冬桜	柿原聰子

長臥しの義妹みまかり冬桜

佐々木史女

凜として普段着で観る冬桜

反町 修

冬桜かつて夫との散歩道

笹本啓子

湯上りの赤児の匂ひ冬桜

高島寛治

今日明日の命短し冬桜

佐藤克之

冬桜指のふしぶし強張りぬ

高橋満耶子

産声がひびく窓辺や冬桜

篠崎紀子

窓越しの冬桜背の治療室

武田重子

うすら日や句碑を目当ての寒桜

下川光子

吹く風に和む丘にも冬桜

田中章嘉

小枝には「吉」のみくじや冬桜

菅原卓郎

尊徳は今も健在冬桜

鳥羽和風

白き息向かふかそけき冬桜

杉浦理恵

遠き日の面影霞む冬桜

飛永 鼓

微かなる母の頷き冬桜

鈴木玲子

冗舌は似合はない人冬桜

外村紀子

流星の欠片はいづこ冬桜

諏訪サヨ子

正倉院見守つてをり冬桜

仲田利子

冬桜明治の偉人の記念碑に

関谷多美子

満開とて丘の淋しき冬桜

西幅公子

札所巡り番外鬼石の冬桜

瀬戸雄二郎

冬桜獣繰り出す宴の夜

野口和子

脇役が主役の舞台冬桜

染谷風子

「ありがたう」を父に言へずに冬桜

野田静香

ポスト前われ待つやうに冬桜

山道や薄紅色の冬桜

野平美紗子

野村美子

## 山紫集作品評

### 網野月を

冬桜 鯉は悠悠 川上る 南條きわゑ

上五に配した季語は一読、時季の設定のみの効果を想定しているように読める。しかしながら、一方の主人公である「鯉」の姿態や所作がリアルに見えてきている。もちろん「悠悠」という副詞が大きな効果をもたらしているのだが、「川上る」という行動の方向性が、冬なのではあるが「桜」と呼応していると考えられる。中七座五の散文的な叙法も掲句の場合、リズムの流暢さを引き出しているようだ。

冬桜きりんの舌の長きこと 石田慶子

上五の季語と中七座五の句意の取り合わせの句と解釈できる。作者は従来の「冬桜」の本意とは異なるイメージを創意して中七座五の句意と取り合わせたのではないだろうか。遭

遇した際の「冬桜」の存在感、色合いや大きさなどの実際は想像の外になったということだったと筆者は想像する。もしかしら取り合わせることで季語「冬桜」の本意をより大きく拡散し、また展開しているとも考えられる。

冬桜抜けゆく風の投げキッス 菅原真理

作者は「投げキッス」をしつかりと受け止めているのである。ただその「キッス」は「抜けゆく風」に乗って来た「冬桜」のそれである。ここで「冬桜」を擬人と解しては、川柳的解釈になってしまう。上五で一度切れを作り出しているから、「投げキッス」の主をあらためて推量してもよいところだが、あくまでも「冬桜」の「投げキッス」ということにおきたい。

逆光に浮かぶ横顔冬桜 曲淵徹雄

座五の季語「冬桜」を背景としての叙景句である。「冬桜」という季語の本意の多くの部分は弱さ、儂さ、小ささ、淡さなどに通じるところに起因しているだろう。掲句はその本来の季語のイメージの上に成立しているように読める。

「横顔」は「逆光」の中でその表情が分からないのだが、「冬桜」は生き生きと作者の目には映って、明瞭な形を成しているようである。その「横顔」と「冬桜」のコントラストが見事なのである。

加えて「横顔」はつまり「冬桜」を見ている顔なのである。

車酔を癒す峠の冬桜 森美枝子

作者は車窓からの景を詠まれたのかも知れないが、筆者は峠での一時休憩の際に車外へ出て「冬桜」を見つけた、と解したい。筆者はバス遠足が苦手である。前夜から緊張で体を固くしてしまふ。「車酔」の際に楚々と微笑みかけてくれる存在ほどその緊張をほぐしてくれるものはない。遠く山並みを見ながら、深呼吸すると「冬桜」の香が胸いっぱい広がり、体調だけでなく心も癒されるようなのである。

くちびるが好きとかすかに冬桜 渋谷きいち

こういう句意は解説してしまつては野暮の骨頂というものだ。何も解き明かさなくとも水明の諸姉姉にはすべてがお分りの事と思う。中七の「かすかに」と座五の「冬桜」の符合がびつたりと合っている。「くちびる」の「かすか」な動きを見逃さなかつた作者の心は「くちびる」の方と同心しているのである。

老舗の庭の狭くなりしも冬桜 梅澤輝翠

句意については、何通りかの解釈が成り立つであらうと思われる。「狭くな」つたのはどうしてだろうか。物理的になのか、心理的になのかということである。筆者は心理的な「狭」さを感じた。「老舗」の周辺にはビルが立ち並び、借景などというものではないのだが、かつての広広とした庭の風情が無くなつてしまつたと解釈した。その内庭に「冬桜」を認め

た作者の心の内の在り様が複層的に描き出されている。

今生のたましひの色冬ざくら 梅澤佐江

通常は桜と「今生」を取り合わせる人が多いのだが、作者は「冬桜」に「今生のたましひの色」を見つけたのである。従来、「今生」を桜に取り合わせることは類想が多い。しかしながら、「今生」は仏語であるので、掲句は季語「冬桜」を配したことで一層の深化を遂げた句になつたようだ。寂しくも耐寒の逞しさを併せ持つ「冬桜」の本情を余すところなく描き出している。

冬桜シャンパン色の女坂 加藤でん治

座五の「女坂」から高台にある神社を想像した。例えば湯島天神などをである。その「女坂」の片側の斜面には「冬桜」がひと咲き始めて辺りを「シャンパン色」に染めている。いわゆる花卉は瑞々しいものであるが、冬に咲く桜の花弁は特に瑞々しさの際立つものようである。「シャンパン色」という液体の譬喩が効果抜群であるし、その透明な金色が華やかさと同時に気高さも描いているようだ。

花咲爺隠るる木陰冬桜 保坂翔太

中七の「隠るる」と「陰」「木陰」と「冬桜」には重複感があるようだ。しかしながら、それだけに一読しての句意の伝達力は抜群である。何といつても「花咲爺」を配した、このウィットには思わず笑いを誘われてしまふ。春の花神が「姫」ならばやはり冬は爺くらいが相応しい。

大村節代 選

鼓  
笛  
集

だれかれに逢ひたき日なり春の空  
湯の宿の名入りの傘や暮春なる  
どの駅も春を先取りチラシ貼る

篠崎紀子

道草のポツケに遊ぶ竜の玉  
大吉の神籤の苦言初詣  
初空へ心を込めて鐘一打

越田栄子

ねぢれたる幹に苔むす初松籟  
針穴にするりと通す縫始  
一心に轍を辿る雪月夜

小林京子

猫抱けば日向のほひ日向ぼこ  
白髪より白白と日向ぼこ  
あの世とはこんなところか日向ぼこ

寺内洋子

潮騒にひとり呟く寒復習  
キーボード叩きつけたる冬の夜  
剥き出しのふくらはぎ愛し露の臺

元田亮一

カッブルの声潜むれど息白し  
玄関に並ぶパンプス春隣  
冬桜口づけしたき淡き色

菅原真理

初晴や天下泰平祈りたり  
海の香も連れて目を染む冬の風  
霜の夜や星に託せし願ひごと

丸屋詠子

花巻の湯に浸かる身や雪溶かす  
南部風鈴小雪まじりの風に鳴る  
座席から暖房人の世のぬくみ

杉浦理恵

五十鈴川の清流掬ひ初詣

外村紀子

声明の流れのままに風花す  
山茶花や心に仕舞ふさよならば

風捕へ風車忙しき冬の海

仲田利子

冬満月大地遍く包みをし  
海蛸の冬夕焼や機影一つ

マスクして応援はずむ相撲場所

榊原聰子

初メール無事到着と息子より  
元日や混雑さけて子等帰る

初日の出オレンジロードひろがりぬ

小駒さち子

一番は氏神様へ初詣  
初買の大き袋や果の香り

初鏡ここはインコの指定席

高橋満耶子

初鏡インコは肩で「こんにちは」  
老鳥のインコうとうと初鏡

眼前に男体山や旅始

鈴木玲子

参道に大き鶏冬ぬくし  
石段のぼる子の掛け声よ初詣

## 天王山の春

秋谷風舎

天王山は、京都府大山崎町にある低山で、羽柴秀吉軍と明智光秀軍の、天下分け目の天王山の戦いがあつた所だ。名神高速道路の天王山トンネルの上が天王山で、標高は二七〇Mで、展望はない。山麓の山崎の地には、サントリー山崎蒸留所があり、アサヒビール大山崎山荘美術館がある。

四月初めの午前中に、山崎から長岡京に向かって歩くと良い。道端で朝掘りのブランド筍（白子）を、格安で売っている。山崎から嵯峨野までの西山一帯には竹林が続く。山崎から歩いてすぐ長岡天満宮がある。梅園や庭園があり、散策に良い。園内には、京筍会席料理で有名な料亭がある。天満宮北西の山裾には、紫式部が氏神として敬つていた大原野神社がある。業平、西行も訪れている。梅園があり、幻の千眼桜がある。西行庵があつた花の寺とされる勝持寺も近い。

花見にと群れつつ人の来るのみぞ

あたら桜の科には有ける

西行

能「西行桜」の元になつたといわれる歌だ。

妻が山崎の美術館に行くといつたので、サントリーの工場が近く、ぜひ見学するようにと奨めた。その夜、京都から帰宅した妻は、普段酒を飲まないのに、サントリーウイスキー「山崎」を手にしてた。ガイドが工場を案内してくれる。見学の最後は試飲コーナーだ。ウイスキーの水割り、CCレモン割りが試飲できる。「山崎」も買える。三十分限定の飲み放題だ。三杯を飲んだ後の、春のウォーキングは心地よい。

# 鼓笛集作品評

大村節代

だれかれに逢ひたき日なり春の空

篠崎紀子

春は心が浮き立つはずなのに、なんとなく物憂い。こうした気持はどこから生じるのか分らないが、春に三日の晴れなしの言葉がある様に、心持ちも三日と定まらないのだろう。上五、中七の表現により、そうした内面の心情が伝わり、共感を覚えた。

大吉の神籤の苦言初詣

越田栄子

何とも面白い句である。初詣の神籤が大吉とは、そりゃあ、めでたいと言いたい所だが、苦言の一語によって、色々と考えさせられる。大吉で喜んだのに、気をつけなさい、考えよ等々、苦言がいっぱい並んでいる。何んだ大吉じゃないのではと、言いたいだろうが気をつければ大吉。いかようにも取

鼓笛集巻頭（二月号）

私の好きな一句（自句自解）

新 曆文

予科練の笑顔の遺影虎落笛

一年ほど前、友人と霞ヶ浦の予科練訓練場を見学した時、何百もの若者の笑顔の遺影を見て結婚してすぐ出兵し、何ヶ月もしないうち戦死した叔父の無念さに涙した時に詠んだ句です。何があっても、絶対日本は戦争してはいけません。

れる苦言が何とも愉快。

一心に轍を辿る雪月夜

小林京子

雪道を歩くのは、本当に大変なので、車の通過した轍があるとほっとする。轍に感謝しながら、家路に急ぐ女人の影が揺らぐ。あと少し、あと少し、気をつけて。

## 「野の花文化賞」受賞を記念して

檜鼻ことは

鳥羽谷俳句会が、第二十五回野の花文化賞（公益財団法人福井県文化振興事業団）を受賞しました。

野の花文化賞は、「野にあつてひっそりと咲く野の花のよみに、ふるさとの文化を継承し、これを支えて努力している多くの方々や、地域社会の中で個性豊かな生活文化の創造と普及のために地道な活動を続けている方々に視点を向け、その功労をたたえようとする賞」であるとのこと。

受賞理由は「地域ゆかりの俳人から受け継いだ俳句文化の継承」でした。新年早々の嬉しい出来事でありました。これを機に、若狭水明、俳誌「鳥羽谷」、鳥羽谷俳句会の歩みを振り返ってみたいと思います。

昭和三年、高浜虚子の高弟 長谷川かな女は埼玉県浦和に居を移し、句友たちの助力を得て昭和五年、俳誌「水明」を創刊します。かな女の句友のひとりが澤本知水でした。知水は、若狭（旧上中町黒田）出身の俳人。この時、東京電燈会社の職を辞し、水明俳句会の立ち上げに尽力しました。現職から退き「水明」の編集と経営に没頭したということ。水明七周年記念祝賀会の折、かな女は知水を正賓として招き、「水明の日を建つ小春山人と」の句を残しています。（山人とは知水のこと）

知水の娘秋子は、長谷川かな女の子息のもとに嫁ぎ、後に、「水明」の二代目主宰となりました。

戦時下の昭和二十年三月、澤本知水と知水の弟である山本

嵯迷の家族は、若狭に疎開。故郷で生活を営みました。ほどなく、澤本知水は、山本嵯迷他、若狭の句友と共に若狭水明を立ち上げました。若狭水明は句会を精力的に開催するとともに、俳誌「鳥羽谷」を発刊しました。初刊は、昭和二十四年五月。以来、昭和二十五年五月まで、毎月のように「鳥羽谷」を発刊していました。ところが、昭和二十五年五月号をもって「鳥羽谷」はいったん休刊となりました。その二年後の昭和二十七年、澤本知水は永眠。享年六十五歳でした。

休刊より二十数年を経た昭和四十八年十月、若狭の俳人、鳥津城子を中心となり、若狭の句友とともに、若狭水明及び俳誌「鳥羽谷」を復活させます。復刊した「鳥羽谷」は、季刊誌として年四回発行。知水らが発刊していた「鳥羽谷」を引継ぎ、第十号からの復刊となっています。長年に渡り、城子は主宰として若狭水明を先導し、句会及び俳誌「鳥羽谷」の発刊に尽力しました。

鳥羽谷俳句会が設立されたのは、平成十年のこと。若狭水明の会員が中心となつての発足でした。鳥羽谷俳句会と俳誌「鳥羽谷」は若狭水明の面輪として活動を続けてきました。平成二十一年四月、「鳥羽谷」第百四十九号の発刊をもって、鳥津城子は、宇田白鷺に主宰を託します。白鷺と「若狭水明」鳥羽谷編集部の俳人たちの尽力により、令和四年二月、鳥羽谷第二百号記念誌を発刊することができました。

「鳥羽谷」を初刊号より読み返しますと澤本知水、その意志を継いだ鳥津城子の情熱が伝わってきます。これからの時代にあつて心豊かに暮らすことが何より大切になるのかもしれない。私共の活動を末永く続けていくことができますように今後ともよろしくお願い申し上げます。

とばだにはいくかい  
鳥羽谷俳句会

住 所：三方上中郡若狭町大鳥羽 25-12-1

電話番号：0770-64-1211

代 表 者：代表 鳥羽和風(とば わふう)

1 業 績 地域ゆかりの俳人から受け継いだ俳句文化の継承

2 活動内容

- 高浜虚子の高弟である「水明俳句会」初代主宰 長谷川かな女、若狭町鳥羽地区出身の俳人 澤本知水、山本嵯迷、長谷川秋子などとの縁により、昭和 24 年に「若狭水明会」が発足。
- 平成 10 年に、「若狭水明会」会員により、「鳥羽谷俳句会」が設立
- 若狭町内に多数の俳句会が存在する中で、「鳥羽谷俳句会」会員は各句会でリーダーとして活躍しており、町内の俳句文化の発展に貢献している。
- 地域ゆかりの俳人たちから受け継いだ俳句文化を現在まで継承しており、会員たちの活動により日頃から俳句に親しむ文化が地域に根付いている。
- 「鳥羽谷俳句会」の運営主体である「俳誌鳥羽谷」は、季刊誌「俳誌『鳥羽谷』」の発刊を長年継続しており、100 号、200 号を記念誌として発行している。発行号数は、現在 203 号に至っており、300 号記念誌発刊を目標としている。
- 今後も、地域の俳句文化の伝承と普及・発展を目指すとともに、各句会における俳句会を盛んにして、地域を盛り上げていく。また、若手の愛好家を取り込むための活動を広げていく。

3 活動年数 約 24 年

4 活動歴等 平成 10 年「若狭水明会」所属の若狭町鳥羽地区住民により設立

月例俳句会を開催（毎月 20 日） 毎年、吟行を実施  
鳥羽公園及び若狭瓜割名水公園に建つ句碑の清掃・管理



# 新春俳句大会の記

保坂翔太

新春俳句大会は、令和五年一月三十日、浦和パルコ「浦和コミュニティセンター」第十三集会室にて開催されました。当日の参加者は、四十八名でした。

令和三年一月三十一日、令和四年一月二十五日に予定されていた新春俳句大会は、コロナ禍のためにやむなく中止となりました。本大会は、新型コロナウイルス感染症はまだ収束しておりませんが、三年ぶりの開催となりました。

当日の受付は、十二時に開始。兼題は、「初明り」「菌朶」の各一句、合計二句。十二時三十分に投句が締め切られ、清記ののち選句に入り、一時三十分に開会されました。

司会・開会挨拶

日高道を

主宰の挨拶

山本鬼之介

主宰より「大勢の方々の参加を得て大会を開くことができ、大変喜ばしい」とのご挨拶がありました。

選句 主宰は多選

雪欄作家十句、一般参加者五句

披講 一般選 保坂翔太

雪欄選 曲淵徹雄

主宰選 山本鬼之介

主宰詠

起きぬけに膝打つ一句初明り

山里や地蔵に菌朶のネックレス

主宰選

三極(天・地・人)

天

初明り受けて微笑む大時計

地

ひと家族のみの一鳥初明り

人

裏白や母が遺愛の鮫小紋

超特選

大漁旗船旗昂ぶる初明り

裏白や譲り受けたる家屋敷

その舌で地球を舐める初明り

裏白や海の鳥居へ道光る

天地の太初を今に初明り

富士塚の膨らむ気配初明り

菌朶供へ枅酒交はず漁師小屋

特選

穏やかに住み古る家に菌朶飾る

まろやかに瀬戸の鳥々初明り

裏白の反りの極みや武道館

稜線にもろびとの列初明り

初明り玩具のべこが首を振る

裏白や聞き置くだけのジェンダー論

節代

翔太

みどり

水尾

かつ子

月を

萬蝶

風子

和葉

輝翠

義子

道を

延昭

〃

〃

〃

〃

野仏の寂光透かし歯朶さやく  
 初明り衛兵の立つ二重橋  
 真つ新な命滾りぬ初明り  
 初明りねぐら飛び立つ鷺の群  
 初明り兎の土鈴目を覚ます  
 裏白や長寿の村の孫曾孫  
 初明り石兎と碑文字光り合ふ  
 ほかほかのべこの仔産まれ初明り  
 鼻梁佳き夫の寝顔や初明り  
 枳酒と露天の湯の香初明り  
 太平洋を越え来る紫雲初明り  
 ヤマトサウルス駆けし山河や飾歯朶  
 裏白のまろみてゆかし八日かな  
 さざはしに山気の満つる初明り  
 裏白や靴揃へ置く上がり口  
 普通選

喜 恵 齢重ねて我が家の誇り歯朶飾る  
 山神の祠に供ふ歯朶ゆかし  
 秘めごとを隠しきれずに歯朶ゆるる  
 天心の月に衰へ初明り  
 氏神を祀りし山の歯朶飾る  
 歯朶飾り拍手揃ふ奥座敷  
 歯朶青し縁切寺の奥に崖  
 歯朶のさまに盆栽初明り  
 昇竜のさまに盆栽初明り  
 森森の海原越ゆる初明り  
 初明り一番鶏の鳴きにけり  
 合掌のおのづから成る初あかり  
 裏白や紙垂新しき農具小屋  
 ビバーグや柔き寝心地山の歯朶  
 心染む句あれ旅あれ初明り  
 健やかに馬齢を重ね歯朶飾る  
 初明りずしりと重き朝刊来  
 オラトリオの流る古民家初明り  
 裏白や人生晴れたり曇つたり  
 裏白を背に「高砂」謡ひけり  
 裏白を飾り火の神水の神  
 火矢となり厨神さぶ初明り  
 カーテンの裾がゆらゆら初明り  
 初明り太陽羽化の兆しとも  
 歯朶飾るドクターへりやいざ出動  
 晴天に背き様なり白き歯朶

水尾 久美子 平穩を願ふ家並歯朶飾る  
 静香 初明り銚子の浜の波頭  
 光子 初明り唐の瓶ある書院棚  
 栄子 待ち顔で歯朶をゆするは若女将  
 宣子 裏白のひるがへる裾幣の風  
 徹雄 一般選、雪欄選、主宰選が無事終了後、主宰の講評があつたのち、主宰から天地人の三極には色紙、超特選には短冊が授与された。高得点者には、水明より記念品が贈られた。

由紀子 高得点者  
 マスミ 公子 一位 日高道を  
 昇 二位 梅澤輝翠を  
 佐江 三位 森川義子  
 千春 四位 福田千春  
 節代 五位 丸山マスミ  
 夕峰 六位 反町修  
 風子 七位 川島夕峰  
 和葉 八位 石山かつ子  
 治子  
 稀香  
 徹平  
 ひさの

閉会の挨拶は、運営幹事長の網野月を氏によつて行われ、本大会は、午後四時三十分は無事終了しました。

『俳句四季』

二月号

わたしの歳時記

鶯

「水明」山本鬼之介

枝折戸にかなふ鳥くる春の昼

鬼之介

若狭出身の父・山本嵯迷は、十八歳で故郷を離れ、勤め人になってからは、社宅や借家住まいが続き、憧れていた庭付き戸建ての家を持てたのは昭和二十八年晩秋、父が六十歳、筆者が十五歳であった。翌春、梅の木の前にある瀟洒な柴折戸の近くに鶯が来て美声を聞かせてくれた。後年筆者が、その時の父の喜び顔を想い出して作句したものである。

「猫八」を偲ぶ初音の二た三度 鬼之介

動物の声帯模写を得意とする物真似師であった三代目と四代目・江戸家猫八の見事な鶯の鳴き真似芸が忘れられない。かれこれ十年ほど前になるが、山間の湯宿に宿泊した朝、囀の整わぬ鶯の初音を聴き、その鳴き声が、

猫八のあの至芸に直結したのである。因みに、中村吉右衛門の「鬼平犯科帳」で三代目猫八が演じた「相模の彦十」の飄々とした人物像は天下一品であり、時代劇専門チャンネルで今なおその芸の魅力にはまっている。

上枝の鶯をよぶ五色豆

鬼之介

某年麗日、濡れ縁で京土産の五色豆をつまんでいたら、思いがけず鶯が鳴いて上枝の葉を揺らした。だが、五色豆の効果は無かった。

来たれ鶯老境つる春の庭

鬼之介

あれから七十年近い歳月が経ち、家人も庭も老いた。黒松と赤松が姿を消し、梅の木も枯れてしまったが、牡丹と百日紅の古木が、今もおお住時のように季節の花を咲かせる。今年も鶯の訪れを待つ庭の木々なのである。

鶯や天守を映す水の碧 青木鶴城  
 ワイングラスに昨夜の名残にほひ鳥 網野月を  
 焦げ過ぎの今朝のトースト初音聴く 石井喜恵  
 富士山に浮力ありあり春告鳥 石山かつ子  
 溪風にのり鶯のこゑわたる 井上玲子  
 路地裏に鶯と会ふ日本髪 井口俊晴

鶯や言葉短き別れかな 梅澤佐江  
 子の婚を祝ぐか鶯谷渡り 大場順子  
 はるか来し天王塚古墳の初音 大橋迪代  
 鶯の次のこゑまつ二人連れ 大村節代  
 鶯や梢跳ね上げ飛び立てり 小林京子  
 名鶯の声を伝ふる秘湯宿 五明 昇  
 うぐひすや陶工房が息を呑む 境 延昭  
 天上に偲ぶ名あまた春告鳥 椎野美代子  
 うぐひすや甘味処の新メニュー 渋谷きいち  
 普段着も華やぐ朝のうぐひすよ 島津初花  
 掛茶屋に安倍川喰へば初音かな 染谷風子  
 鶯や木霊のあそぶ神の杜 田寺玲子  
 初音聴く埴輪に大き耳の穴 鳥羽和風  
 女にも秘めごとのあり匂鳥 永野史代  
 鶯の初音床しき多胡の古碑 原田秀子  
 鶯や溪の露天をひとり占め 日高道を  
 サナトリウムに春告鳥の声高し 保坂翔太  
 鶯や薄日さしたる無言館 曲淵徹雄  
 相聞歌ひもとく集ひ匂鳥 正木萬蝶  
 転任の鞆の重み春告鳥 元田亮一  
 春告鳥卒寿の吾の袖袂 矢作水尾  
 うぐひすの一声沁むる朝手前 柚木治子  
 うぐひすの真つ只中に伎芸天 由良ゆら女  
 朝霧の奥に途切る初音かな 横山君夫

『雪嶺』 一・二・三月号

句誌玲瓏

▽水明 (第95巻7号)

昭和5年9月創刊。創刊主宰、長谷川かな女。二代・長谷川秋子、三代・星野紗二、四代・星野光二、五代(現主宰)・山本鬼之介。月刊誌。発行所 埼玉県さいたま市浦和区岸町。創刊主宰の長谷川かな女は、高浜虚子の高弟で、女流俳句の振興に尽くし、女流俳人の草分けであった。

【水明】は今年で92周年を迎えた。また、かな女以来四代の主宰を経て、平成30年山本鬼之介が第五代主宰を継いだ。

- ・羽子板の重さが嬉し突かて立つ 長谷川かな女
- ・西鶴の女みな墳な夜秋の草
- ・丸き石が尼の墳なり秋の草
- ・曼珠沙華あつまり丘を浮かせけり
- ・冬ばらの影まで剪りしとは知らず 長谷川秋子
- ・春の川指を流してしまひたく
- ・髪よきは女の不幸はたる籠
- ・海より春の風妻よバセリをさきみなさい 星野紗二
- ・柘榴割れる村お嬢さんもう引き返さう
- ・野火ととろろ人間嘗つて尾を持ってり
- ・光年来て光のうるむ春の星 星野光二
- ・藻の花や富嶽の水に權をうる
- ・色に音階あらばフラット竹の春

しばらくはキャベツの芯を噛みたまへ 山本鬼之介  
・マネキンを目白へ運び冬霞  
・くろがねの匂ふ水こそかな女の忌  
かな女以来五代に渡って育んできた歳輪、その歴史の重厚さ格調の高さ、代ごとに其々の主宰の個性、色彩の違いが感じられる。

誌面は先ず表紙裏に今月のかな女句と主宰の鑑賞/主宰抄・華の一句/目次/主宰作品8句/季音同人2名の作品7句と文/冠軍門(主宰作品鑑賞)/硯箱(季音5月鑑賞)/季音・雪/季音月/季音花/水明誌を繕く(高岡修/現代俳句鑑賞/水明賞受賞者ノオト3名(自選各20句と選者評)/水明集/水明通信/作品評(主宰)/水琴窟(水明集5月鑑賞)/山紫集/山紫集作品鑑賞/鼓笛集/鼓笛集作品鑑賞/自句自解/俳誌望見/等々86余頁に及ぶ。且つ、裏表紙裏、裏表紙にも主宰抄の作品36句を掲載。表紙題字「長谷川かな女、絵、内田恵子、カット・福田千春。

- ・佛燈に火蛾水争ひのありし村 山本鬼之介
- ・禾のとび眼鏡くもらす麦の秋 鈴木康世
- ・夏めきぬ人影動く花頭窓 大村節代
- ・熱き手のあの日の記憶梅は実に 栢尾さくこ
- ・袋掛人おもふとき山を見る 菊地ひろこ
- ・大いなる音を残して牡丹散る 島津初花

【記・荒川弘子】

附記・水明と雪嶺

今月の「句誌玲瓏」の記事に「水明俳句会」も採り上げましたが、「水明」は長谷川かな女の創設で、「雪嶺の師承」に当たりませう。

嘗ては、雪嶺俳句会会員の多くが水明俳句会にも所属していた。創刊主宰・横道秀川が水明同人で、且つ雪嶺創刊に札幌水明会や美唄水明会、小樽水明会が参加したことなど、次第に、雪嶺会員も水明への入会者が増えつつあった。現在はその殆どが故人となりましたが、横道秀川・佐藤緑芽・鈴木松風・佐藤伸子・渡辺俳壇・服部水嶺・鎮目梅子・室谷初穂・岡田春水・沼田寿枝女・青山佳根女・中坪かつみ・星野松路・長谷川昌子・村井杜子・佐々木翠川・浅利祐三子・外海未沙子・阿部とみ・国領恭子・吉村敬子・山本圭子・高田まさみ・松橋与志彦・一ノ関てつ女・國兼よし子・嘉橋北城・菅原すすむ・藤井凍土・せとつゆ・板倉とし子・柴田美枝・清水緑子・佐久間都世・中村節子・小野寺左右志良・荒川弘子など四十余名が所属。筆者も水明同人の末席にお邪魔していた。

秀川は水明賞、緑芽は水明賞・季音賞・かな女賞、緑子・左右志良が新珠賞を受賞している。かな女は一時美唄に住んでいたこともあり、札幌・美唄・小樽水明会による季余子・かな女及び正岡陽炎女の句碑が美唄市にある。

【記・荒川弘子】

# 水明例会

## 第一例会（浦和）

境 延昭  
茂木和子 報

初風呂の屋根の上より明烏  
差し込めば鍵穴震ふ寒の入  
「おい」と呼び薪を足させる初湯かな  
ほかほかの初湯の嬰を抱き受く  
初湯して金沙のやうな星数ふ  
病み抜けて産湯のごとき初湯かな  
覗き見の出来ぬ鍵穴冬の萌

はるみ 順子 京子 稀香 治子 由紀子 延昭  
——以上特選

節代

## 第二例会（東京）

山中みどり  
青木鶴城 報

駐車場の穴場を確保初葉師  
繰り返す掛け湯の音や初湯殿  
稚を抱き初湯のひかりあふれしむ  
うす酔ひの総身にかける初湯かな  
穴場狙ふ場外売場寒鴉  
子ら洗ふ初湯の爺の手酌かな  
健やかな体願ひて初湯かな

和葉 チアキ 順子 治子 延昭 稀香 和子  
——以上特選

道子

## 第三・若松合同例会（東京）

五明 昇報  
正木萬蝶

ステジュール書き添へ掛ける初曆  
蓋とれば湯気に向ふに笑顔あり  
一句さへ作れぬままに松過ぎぬ  
ふぐちりの福を集めしお雑炊  
一人鍋気楽味はひ舌鼓  
渴く街のひと時の雨春近し  
寄鍋や仕切る息子の奉行ぶり  
猪鬣鍋屋近寄りがたき剥製よ  
両国や橋西詰の牡丹鍋  
新たなる柱の傷や春近し

サカエ 弘子 竺仙 いちい 里子 峰雄 敏江 則子 鶴城  
——以上特選

徹雄



伊勢海老や雑魚を蹴散らす赤備  
初明り昨夜伏せたる鍋と笹  
伊勢海老の髭の饒舌妻の無言  
天金の孤高の句集淑氣満つ  
鳩の笛開門高き小名木川

俊 晴  
ひろこ  
萬 蝶  
〃  
昇

——以上特選

伊勢海老の 大空飛んで運ばれて  
三宝の飾海老猫素通りす  
伊勢海老の全き髭や祝ぎの膳  
扱ひにちと構へたり伊勢海老ぞ  
福笑ひ明けて卒寿の笑ひ皺  
二人きり伊勢海老添へし華燭の典  
初明り指を曲げたり伸ばしたり  
ねぢれたる幹に苔生す初松籟  
伊勢海老の朝日輝く武者姿  
食積の蓋ずれてをり誰やらむ  
伊勢海老や研ぎ澄ましたる出刃包丁  
いかめしき伊勢海老ちよつとやぶ睨み千  
伊勢海老を据えて敵か祝膳  
義時の最後見届け去年今年  
赤備の伊勢海老に沸く伊豆の夜

はるみ  
星 歩  
順 子  
徹 雄  
喜 久  
理 恵  
康 世  
京 子  
俊 晴  
雅 夫  
鶴 城  
佐 江  
慶 子  
昇

第四例会 (浦和)

境 延昭報  
石井喜恵

吾子の手に小さき青空竜の玉  
竜の玉跡継ぎ絶えし長屋門  
秘色色の空より雫竜の玉

昇 寛治  
順 子

晴れ晴れと若水捧ぐ巫女の腕  
若水に米寿の光波みにけり  
若水を硯に二滴命名紙  
祝詞を交はし若水汲みあへり  
颯爽と少年剣士竜の玉

マスミ  
玲 子  
曆 文  
由紀子  
翔 太

——以上特選

弾ませて子ら玩ぶ竜の玉  
使ひ勝手良き竹箒竜の玉  
龍の玉藍き星ある銀河系  
道草や妖しく光る竜の玉  
龍の玉跳ねて弾んで雲龍へ  
竜の玉藍を極めりフェルメール  
若水や長子に多き役回り  
若水やこの一年を息災に  
若水の水暗き身ぬちに力沸々と  
若水のこぼれて響く青竹に  
若水や水面の深き釣瓶井戸  
若水を供花の壺にも注ぎたり

でん治  
マスミ  
恵 子  
翔 太  
光 子  
曆 文  
延 昭  
玲 子  
順 子  
由紀子  
喜 恵

第五例会 (浦和)

梅澤佐江報  
河野はるみ

月淡く残る岬の野水水仙  
水仙や夫妻別の恋ごころ  
崖水仙真鶴岬すぐそこに  
水仙や枯山水の石の妙  
真つ直ぐな意志切り岸の水仙花  
水仙や生涯教師たりし母

はるみ  
〃  
水 尾  
義 子  
佐 江  
〃

関西例会 (大阪)

森本早苗報  
大橋旭代

水仙や全景の海見下ろせり  
買初の人形焼は七福神  
買初は葉野菜根もの閻魔帳  
水仙や磨きのかかる床柱  
買初や表紙明るき家計簿を  
馥郁と母の忌重ね水仙花  
野水仙安房の荒磯波ばかり  
買初のインナーウェア海の色

以上特選  
理 恵  
美佐尾  
はるみ  
宣 子  
玲 子  
義 子  
水 尾  
佐 江

鬢物の姫と恋路を三ヶ日  
天井を鏡の光日脚伸ぶ  
合せ鏡の目許つややか日脚伸ぶ  
月冴ゆる城下に古き芝居小屋  
隅の井は城のぬけ穴寒昂  
日脚のぶ源氏香聞く紫野  
種尽きぬ噂話や日脚伸ぶ  
理由もなくときめく胸や日脚伸ぶ  
日脚伸ぶ鳩の微睡む天主閣  
待春の窓辺にほどく蝶糸  
一幅の水墨画なり初山河  
日脚伸ぶ足湯仲間鳩三羽  
獅子頭脱ぐや半身もいろいろに

鬼之介  
〃  
〃  
玲 子  
〃  
〃  
洋 子  
〃  
早 苗  
ゆら女  
千世子  
旭 代  
以上特選

寒稽古主の声を犬の耳  
 日脚伸ぶゲーム上級編クリア  
 束の間の日射しに酔へる仏の座  
 飄飄とカーブを曲がる春着の子  
 寒牡丹姫御の被く藁ほつち  
 未知数へ向ふ一歩や初詣  
 閉め出され鍵屋を待てり寒の月  
 揚舟に幼と仔犬日脚伸ぶ  
 托鉢の草鞋さしきし霜柱  
 白波立つ南紀の浜や日脚伸ぶ  
 初えびす絵馬の兎は跳ねたがる  
 たてがみを逆立て獅子は舞ひおさむ

ゆら女  
 洋子  
 智恵子  
 人美  
 早苗  
 千津子  
 千世子  
 和子  
 道子  
 千枝子  
 満耶子  
 廼代

## 昔話あれこれ 25

### 雄略天皇、吉野の童女との聖婚

天皇が吉野の離宮に行幸した時、吉野川の辺に見目麗しい乙女がいた。天皇はその乙女と婚し、朝倉宮に帰った。後日吉野の離宮に行幸した時、以前乙女と会った所に留まり、そこに立派な呉床(床几)を立てて座り、手ずから琴を弾いてその乙女に舞を舞わせた。その乙女が上

手に舞ったので、それを祝福し歌を詠んだ。

呉床座の 神の御手もち  
 弾く琴に 舞する女常世にもがも

(大意 呉床に座っている神、その神の御手で弾く琴に合わせて舞う乙女。その美しい姿よ。永遠であつてほしい。)

(\* 右の歌で雄略天皇は自らを「神」と称している点に注意)

### 阿岐豆野の遊獵 国号の起源

天皇が阿岐豆野に行幸して呉床に座っていた時、虻が飛んできて腕に噛みついてた。  
 するとすぐに蜻蛉が来て、虻を啜えて飛び去った。そこで次のような歌を詠んだ。

み吉野の 小室が岳に

しし伏すと 誰そ 大前にまをす  
 やすみしし わが大君のしし待つと  
 呉床に座しし しろたへの 袖きそなふ  
 手跡に 虻かきつき その虻を

蜻蛉はややひ かくのごと  
 名に追はむと そらみつ 倭の国を  
 蜻蛉島とふ

(大意 吉野の小室の岳に猪や鹿が潜んでいると誰が天皇にもうしあげたのか。獲物が出てくるのを呉床に座って待っていると、虻が袖の上から腕に食いついた。しかしその虻にすぐ蜻蛉が来て食いついた。)

お手柄の蜻蛉を名につけようと、倭の国を蜻蛉(あきづ)島というのだ。その時から、その野を名付けて「阿岐豆野」と言う。

(\* 『広辞苑』より・

あきずしま (秋津州・秋津島・蜻蛉州)

また広く日本国の異称。あきずしまね。あきずね。

もと御所市付近の地名から。  
 『日本書紀』に神武天皇が大和国の山上から国見をして「蜻蛉の譬占(交尾)の如し」と言った伝説がある。(つづく 丸山マスマ)

各地句会



水明小川句会 (小川)

久々に紅さし気どる初鏡  
祝箸捨つるに惜しき滑らかさ  
目出度さをスマホで祝ふ年賀状  
笹鳴や耳そばだつる藪の中

芙蓉句会 (浦和)

事足りて心豊かに初酉  
初春や競ふ駅伝ひらめ筋  
つくばひに水を通はせ初手水  
人の波風いで雀の五日かな  
大畑の地平線から初日の出  
幼文字賀状はみだし笑みこぼれ  
初富士や振り返りなほ振り返り

珊瑚の会 (浦和)

酔牡蠣つるり海の匂ひがかげめぐる

きよ子  
綾子  
栄子  
正子  
道子  
税子  
ともこ  
文子  
美子  
かつ子

目で話すことにも慣れて牡蠣割女  
牡蠣を焼く煙人呼ぶ浜の小屋  
下萌やいよよ艶良き岬馬  
潮騒を葉味に安芸の牡蠣尽し  
酔牡蠣を啜る怪奇小説読みながら  
牡蠣すすり満身に海満ちてくる  
紐長く繋がるる山羊草萌ゆる  
養生の濟まし公園下萌ゆる  
使はれぬままに古井戸草萌ゆる  
牡蠣割女うはさ話に嘘少し

櫻蔭句会 (浦和)

ラグビーやトライの前の肉弾戦  
空気のやうな二人して葛湯吹く  
ラグー四人引きずり進むトライかな  
かき回す指の節くれ葛湯かな  
ラグビーの授業手縫ひのヘッド・ギア多美子  
喉越しにとろりの甘さ葛湯かな  
宝もの置くがにラグートライせり  
掌に包む葛湯にうかぶ里景色  
葛湯飲む夫の横顔七十二

りそな俳句会 (浦和)

太箸に進取を託す祝ひの日  
次々と背を追ひ越され祝箸  
太箸や昭和の家族陣の座に

喜恵  
マスミ  
水尾  
昇  
恵子  
史代  
広子  
和子  
和葉  
節代  
美智枝  
茂子  
公子  
真理  
千恵  
幸代  
由紀子  
千恵  
代

太箸に悪戦苦闘青き目は  
家族の名書く嬉しさよ祝箸  
妻の名を真つ先に書く祝箸  
左利きの多き家系や祝箸  
樫や世に珍しき大家族  
皐月の会 (浦和)  
寒声や丸に十の字の示現流  
トンネルを抜け真ん丸の初旭  
天辺にあまたの影ぞ寒鴉  
我が影に三顧の礼や寒鴉  
我が手の輝愛し母ゆづり  
寒梅に止まり仮眠をする小鳥  
水上に駆け引きの跡フィギュアかな  
枯木立夕陽が射して阿修羅像  
輝や母の糠漬け茄子の蒼  
酔眼の女はいつか雪女  
くるみ割る術を忘れし寒鴉

野菊の会 (与野)

鶏小屋に擬卵ころがる初景色  
にはどりの鶏冠うれし枯れの庭  
引つ越しす寒暁に聞く鶏の声  
年祝ぎの一番鶏を遠くより  
初鶏に応ふる峽の筈かな  
時の疫の鶏舎静もる寒さかな

久美子  
建治郎  
道を  
マスミ  
雅夫  
山菜  
昭一  
光代  
珪子  
順子  
紀子  
静香  
孝磨  
曆文  
美佐尾  
さいち  
美代子  
和子  
清子  
まな  
知子  
光子

水明熊谷句会 (熊谷)

正一位寄進灯籠細雪

旅の夜に轟く音は鯛起し

寄辺なき身の上同土炬燵猫

雷様に豊漁ねがふ鯛起し

豊漁の前兆ゆる鯛起し

妙薬や夫の指南の玉子酒

鯛起し漁師の妻の胸さはく

雛の会 (浦和)

心地良き目覚めの一日福寿草

築百年の床より上る隙間風

新記録うみ出す駅伝山の神

日の出のごと咲き始めた福寿草

元日草とうに越したる妣の齡

りんどう俳句会 (浦和)

初詣無理せず選ぶ女坂

微笑仏お会ひしたくて初詣

麦の芽に取り囲まれし古墳群

麦の芽の天地青青むさぼれり

狛兎入り日にびかり初詣

麦の芽や戦の終り願ひたし

小上がりで赤福ふたつ初詣

疾風の襷つなく手息白し

玉砂利の鳴る音すがし初詣

初富士や松風清き海青し

荒磯や冬日を弾く波と風

年始め父の広ぐる大風呂敷

風吹けば天の羽衣冬桜

青葉の会 (浦和)

大櫓の瘤の顔めく冬木立

足裏より土塊むくり春隣

新婚の床暖房の家を訪ふ

初釜の足袋の白さや裾捌き

落日の光あびたる冬木立

蠟梅や静かに暮るる能舞台

北風や足湯につかり家路つく

淑気充つ命名記す墨の香

雪下駄の赤い爪草白き足袋

光が丘俳句教室 (東京)

寒梅や空の青さを透き通し

雪しんしん炬端話は怖すぎる

七草のフランス料理華やげり

幼子のてこずつてゐる祝箸

芽吹句会 (浦和)

若水に米寿の光汲みにけり

亡き母の面影に似て初鏡

君夫

翔太

徹雄

利子

順子

美紗子

真理

美智枝

美子

公子

啓子

洋子

和子

輝翠

和子

和子

はる

康子

典子

理恵

玲子

諒明

晴天や参賀の小旗波立てる

ふるさとの空気は旨し齋粥

面食らふ家電の故障寒に入る

初釜や長い袂を持って余し

門松と背丈おつかつ子沢山

筆走る賀状一枚手に重し

無意識の訛言葉や初電話

きざきサークル (浦和)

卒寿の師囲む傘寿や女正月

風花に暫し明るき上州路

盛り上る病談議や女正月

風花や河原飛び交ふグライダー

参道に飴切る音や風花す

風花や空澄み切つて赤城山

風花の光の中に下校の子

風花を帽子に乗せて娘来る

石段を下れば秘湯風花す

あゆみの会 (浦和)

老いの身に健やかなれと屠蘇を酌む

屠蘇を酌む身ぬちに邪気を飼ひならし

仏壇の夫に一献屠蘇を酌む

探梅やツアアの出発点呼から

屠蘇祝ふ夫の家伝の御重箱

娘らはスマホで参加屠蘇祝ふ

修

正子

チアキ

富子

ひろこ

千重子

道を

昇

光子

啓子

喜代子

健司

和枝

和枝

和子

和子

山遊

俱子

啓子

和子

重子

藻好

若狭水明会 (若狭)

甲砲の十九発や秋の天

谷駆けて村を閉ぢたる秋時雨

渋皮を剥くひと手間の栗ご飯

朝倉の土堀濡らして秋時雨

踏台で搜す土鍋や秋時雨

そこはかと秋の時雨や浮御堂

包丁を研ぐ手止めたる秋時雨

踊り子は小百合天城は秋時雨

山茶花 (浦和)

墓碑に「寂」ただ一文字の淑気かな

注連飾り何かよいこときつとある

注連張つて会員増ゆる太極拳

勤行を始める時の淑気かな

松飾りかけて我家のととのひぬ

蛸の会 (浦和)

野ざらしの供花に降りる冬の蝶

凍蝶や乱舞の後に祈るらし

やうやうと日記の続く寒四郎

蒼天の下凍蝶の翅薄し

寒の内撞けば割れそな寺の鐘

ドアノブにこはごは触れし寒の入

凍蝶や枯葉となりて身を潜め

寛久

初花

保人

和風

こは

郁子

白鷺

光子

清一

美江子

綾子

風舎

しるく

礼子

朝香

ひさの

元美

さち子

凍蝶やピタリと合はぬ両の翅

凍蝶や食ひ入るやうに診断書

心身を奮ひ立たせる四日かな

鶴川山百合句会 (町田)

メタセコイア枯れて昔の別所沼

Gパンを櫓に載せて掘炬燵

しんしんと睡魔住みつく炬燵かな

十二月八日返事の来ない手紙書く

枯葉降る降るさあワルツを踊ろう

枯木にもそれぞれ個性山になる

立つ夫に「ついで」とたのむ炬燵かな

父座る所だけ汚れ炬燵蒲団

取り立てて何も無き日の柚子湯かな

掘炬燵幼きころの秘密基地

観覧車の瞬き遙か枯木立

蘭の会 (浦和)

変はりなき日日でありたし年迎ふ

煤けたる大黒天と年迎ふ

去年今年過ぎゆくもの多きかな

元旦の光の中で箸をとる

元日やショパン弾く手に陽の入りて

稜稜と波あかあかと初日の出

こと多く筒条書きなり初日記

静寂を破る雄叫び初稽古

月を

鶴城

宣子

雄二郎

月を

喜久

史代

広子

由美子

千春

萬蝶

理恵

美千子

玲子

トエ

珪子

夕峰

比早子

悦子

まりこ

さよ子

風子

かな女句碑羽子板掲ぐ神の門

御降りには雨から雪に肩叩き

床の間を飾る赤き実淑気満つ

お書初天井高き仏間かな

十二月立食ひ蕎麦で鉢合せ

悠悠と振り返り行く狸かな

鳩浮かび写角の外にをり

梯子立ちドロロンの飛ぶ出初かな

雪催コンビニの灯の煌煌と

軒下に相寄る雀雪催

奇つ怪なドロロンの飛ぶサンタの夜

悴かみてグーパー体操まづ最初

赤色が花舗を食み出す十二月

ミモザの会 (横浜)

賀状来る今も夫の名見る不思議

行儀よく一口はこぶ雑煮箸

平和こめ両手あはせる初詣

のんびりと旅行の気分絵双六

丹沢の稜線鮮やく淑気かな

元日や何をするにも「初」をつけ

三日はや「ハウスバーモントカレーだよ」

二日はや猫カフェの犬大吠えす

近づけぬ神を遠目に初詣

風舎

月を

鶴城

京子

延昭

まさ子

早都子

健司

俱子

美枝子

俊晴

淑子

昇

慶子

玲子

亜弥子

由美子

詠子

栄子

萬蝶

史代

千春

水明澤つくし句会 (大阪)

塗盆の月を枕に雪うさぎ  
春隣夫は私の右隣  
凍星に晒すタトゥーや露天風呂  
日脚伸ぶ命も少しのびた気に  
ドアノブと火花散らして初句会

人美  
きりり  
智恵子  
洋子  
ゆら女

野ばらの会 (浦和)

忌へ向かふフェリーの舳先星凍つる  
冬銀河吾にもありしラブロマン  
達磨寺へ続く細道竜の玉  
冬の星迎へのママは小走りに  
竜の玉見つけて運氣上がるかな

栄子  
茂子  
秀子  
夏江  
みき子

水明松本句会 (松本)

一葉の枯葉はらりと我が人生  
買物のリスト忘るる年の暮  
手に菓子チヤイルドサンタ買物中  
夕映えや切絵のやうな実南天

陽子  
マリ  
玲子  
寿子

若鮎句会 (浦和)

地に低く御仏おはす仏の座  
早梅や置き配といふ新手攻め  
去年今年皆勤賞の置時計  
よちよちの赤い靴先仏の座

稀香  
芳春  
拓真  
さなえ

朝やけに浮き出る飛翔寒鴉  
婚家へと帰る姉妹や寒鴉  
二声三声続きて影や寒鴉  
太りすぎ昔は何処寒鴉  
三界に願ふ安らぎ仏の座

香音子  
万美  
月を  
喜夫  
鶴城

雪折の枝の嗚咽や露天の湯  
雪折の挽みに細る登校路  
雪折や長き道のり背負ひしもの  
雪折の音のいくたび夜の静寂  
大寒の廻廊黒く光りをり

小麦  
義子  
鶴城  
水尾  
静香

和歌山水明句会 (和歌山)

雪吊りは園の豎琴奏でたし  
歌留多取り寡黙な人が声をあげ  
絶景や雪化粧せし紀州富士  
あたふたと駅まで送り寒の月  
老鳥のインコうとうと初鏡  
烏骨鶏の卵届きし今朝の春  
こんな日は猫を友とし日向ほこ  
塗椀のふた開けられぬお元日

和子  
道子  
千枝子  
千世子  
満耶子  
さわゑ  
洋子  
廻代

セルフレジ戸惑ふ古いや日の短か  
孫ふたりひ孫ひとりのお年玉  
十八歳大きな夢よ初詣  
鉢の水ペロリとなめて猫去りぬ  
寒満月老人ホームの夜の更けて

和子  
ナヲ子  
洋子  
聡子  
紀子

神戸大池句会 (神戸)

濡れ羽色も声も新たや初鴉  
半生を峡に住み古り初日の出  
占ひや声高々と初鴉  
初東風や青きマフラーひるがへり

早苗  
礼子  
千津子  
玲子

寒月光スカイツリーは孤独なり  
落し蓋コトコト響く寒夜かな  
寒日和思ひ立ちての墓参り  
蛇の目さし咲くよはんなり寒牡丹  
厳寒の山は静止画めいて暮る  
寒風の赤城おろしが肌をさす  
凜とした掛け声響く寒稽古  
先客あり炬燵は猫に占拠され  
廃屋の遊里の路地や捨炬燵  
面を打つ音冴えわたる寒稽古  
置炬燵いつも無口な親子酒  
寒風やかな女身近に中仙道

富子  
文子  
富美子  
千重子  
敦子  
亮子  
妙子  
朋子  
裕誌

たかなな俳句会 (川口)

枯庭を清むる若き作務衣僧  
大寒の主なき椅子の重きかな  
大寒の水に潜らす絹豆腐

久美子  
のり子  
ふくみ

治子  
克之  
彰二  
裕誌

円卓の会 (浦和)

歳重ね凜と生きたし初手水

羽根つきの空振り幾つ爺と婆

幸せのハンカチ胸に福寿草

晩学の深夜放送去年今年

明け方のナースコールや福寿草

初手水午前零時の町の黙

志ん朝の芝浜恋へば年始酒

「快晴」に始むる日記去年今年

新樹の会 (浦和)

昔より神は無慈悲よ寒の雨

無住寺に寒九の雨の降るばかり

寒の雨風加はらば地獄変

筆始め平安仮名を慎重に

幼子の晴着の裾に寒の雨

飾り棚に古びし小芥子寒の雨

何となく時計見てをり寒の雨

俳句の手ほどき (岩槻)

祝盃の酒も御法度寒の水

出初式法被凍凜しき梯子乗り

茹で卵花壇に埋める寒鴉

啼く声の上から目線寒鴉

法要の香の名残や冬座敷

修太

翔香

静一

輝翠

道翠

輝翠

月を

鶴城

風子

道修

平通

清吉

徹雄

鶴城

倭子

佐江

ます美

延昭

水尾

華やかに揃ひの法被初仕事

寒柝や路地裏めぐる影法師

法螺貝の澄み渡るなり初酉

神杉のてつべんを執る寒鴉

田に一羽ナルシストめく寒鴉

電線にまづは斥候寒がらす

高野山緋色法被の初読経

曇天を横切る寒鴉声低き

ねぐらへと飛び立つ五羽の寒鴉

標や廊下くろくろ法師の湯

柿の木塾 (浦和)

あかがりや強がる母の鼻柱

あかぎれの手をもて運ぶ飼葉桶

正座して懐紙に頂く切山椒

輝のあとかたもなし平らかに

深川にお江戸の名残切山椒

あかぎれの昭和の母の手を思ふ

小指立て切山椒を摘む君

輝の指いと拒みけりボタン掛け

めだか句会 (浦和)

綾取や糸の長さで口喧嘩

綾取のほうきの唄や順番こ

言ひたきをたがひに述べて日向ぼこ

綾取や魔法をかける従姉の手

義平

徹太

翔男

桂子

卓郎

美子

幸代

久美子

かつ子

恵子

かつ子

節代

和葉

昇

水尾

俊晴

和子

はるみ

知子

六弦

敦子

あやとりを見せて甘える母の膝

探梅や嬉しいものに花ひとつ

探梅やいつもの庭は分譲地

探梅や母の小さく丸くなる

水明通信

さいたま市 染谷風子

忘れられぬ一句

「蟬時雨兒は擔送車に追ひつけず」

掲句は、石橋秀野の絶筆である。彼女は、明治四十二年生れ、文化学院で短歌を与謝野晶子に、俳句を高浜虚子に学んだ。二十一歳の時、慶大生石橋貞吉(文芸評論家山本健吉)と結婚し安見子を儲けるが、戦時下の厳しい生活、食料難から結核に侵され、昭和二十二年九月、京都の療養所にて、三十八歳の若さで死去した。病が進行し、幼児を抱えた自宅療養が困難となり、入院することになった。療養所の廊下を担送車で運ばれる。蟬時雨は、担送車を追いかけてながら母を呼ぶ幼児の泣き声と重ってゆく。その声を聞く母の心中は如何許りであったろうか。掲句は、俳句を始めて間も無く知った。たったの十七音でも、一編の小説以上の表現が可能であることを教えてくれた一句である。

十三子

忠夫

月を

鶴城

# 水明全国大会 兼題句募集

水明全国大会の兼題句を次のように募集します。ふるって御応募下さい。

兼題 「更衣」(ころもがへ) 衣更ふ

「竹の秋」(たけのあき) 竹秋

※「更衣」「竹の秋」は右の季語で詠む事

「金」詠込み ※「金」は季語として使わない事。春の季語を入れて詠む事。

句数 通じて二句。(一組)

・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。

・組数は制限しない。

出句料 一組につき千円。

締切 四月二十五日(発行所必着)

※投句用紙(水明三月号・四月号に添付)使用のこと。コピーも可。

## 令和5年水明全国大会のご案内

[と き] 令和5年6月25日(日曜日)

[と ころ] さいたま共済会館

[行 事] かな女賞・季音賞・水明賞・新珠賞

鼓笛賞・山紫賞の授賞

新誌友紹介。季音同人、新同人の発表。

兼題入選句の発表と授賞、講評等。

親睦会、参加費、宿泊斡旋、申し込み、などは4、5月号に添付の指定用紙を使用し、参加費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。

(申し込みは5月1日～6月5日をお願い致します)

水明俳句会 全国大会実行委員会

## 春の吟行会のご案内

[日 時] 令和5年4月4日(火)

[会 場] 浦和コミュニティーセンター第13集会室  
(JR浦和駅東口前パルコ10階)

[受付開始] 10時 [投句締切] 12時(当季囑目2句)

[開 会] 13時

[参加費] 1,000円(お弁当・お茶は各自で持参して下さい。)  
\*懇親会は行いません。

[申 込] 3月6日～24日まで。申込書(3月号に添付)会費を添えて総務部宛にお申し込み下さい。

[吟行場所] 調神社、玉蔵院及び別所沼公園等  
\*吟行地の地図を受付に用意しておりますのでご入用の方はおより下さい。

○大勢の方の参加をお待ちしております。

主担当「りんどう俳句会」 支援「事業部」

## 若狭句碑めぐりバスツアー PART IIのご案内(3)

水明通巻1100号・鳥羽谷通巻200号を記念する「若狭句碑めぐりバスツアーPART II」まで2カ月余りとなりました。『水明』2月号には、山本主宰による解説「水明のふる里は若狭」、青木鶴城氏編集の「若狭バスツアーの魅力紹介」が掲載されておりますが、ご覧いただけましたでしょうか。いよいよ今号には「バスツアー参加申込書」が綴じ込まれ、参加費の振込方法も記載されておりますので、皆様奮ってご応募下さい。水明会員多数のご参加の下、爽やかな若狭の初夏を心ゆくまで楽しもうではありませんか。

[記]

**【期 日】** 令和5年5月29日(月)、30日(火)、31日(水) 2泊3日

**【交通機関】** 大型バス1台

**【募 集】** 募集人員40名 申込締切3月31日

**【担 当】** バスツアー実行委員会、事業部

**【参加費】** 65,000円(参加者40名の場合)

**【旅 程】**

- ①発着地 さいたま市浦和区仲町・「玉蔵院」前  
(出発午前7時、帰着午後5時)
- ②ル ー ト 首都高速・東名高速・新東名高速・北陸自動車道  
(復路はこの逆)
- ③宿泊施設  
**【第1夜】** 三方五湖水月湖湖畔「きらら温泉・水月花」  
☎0770-47-1234  
\*翌朝クルーズ船で初夏の三方五湖を巡ります。(予定)  
**【第2夜】** 御食國(みけつくに)・小浜市内「ホテルせくみ屋」  
☎0770-52-0020  
\*翌朝、小浜お魚センターで海の幸のお買い物を楽しめます。
- ④観光地 三方五湖……レイククルーズ(予定)  
鳥羽公園……「鳥津城子」「澤本知水・山本嵯迷」「宇田翠保」の句碑  
瓜割公園……「長谷川かな女」「長谷川秋子」「星野紗一・明世」の句碑  
ほか、小浜お魚センター、熊川宿、有名社寺・旧蹟、若狭箸工房など

◆本号以降も順を追って案内を掲載しますので、欠かさずご覧下さい。

主 宰 山本鬼之介  
実行委員長 五 明 昇

風 声

○現代俳句一月号——「地区別現代俳句歳時記」欄  
身に余る初夢しかも膝枕

鬼之介

○現代俳句一月号——「現代俳句の風」欄  
冬枯の生垣満たす記念樹よ

岡野順子

赤紐で括りし丑の年賀状

菊池ひろこ

冬ざれや五箇山豆腐縄しばり

大塚茂子

根上がりの松の力よ冬青空

小駒さち子

板長が絵皿に咲かす海豚の花

五明 昇

短日や待合室に微熱の子

本橋稀香

○現代俳句一月号——「現代俳句の風」秀句を探る」欄  
圓山二幸子氏の感銘十句抄に

板長が絵皿に咲かす海豚の花

五明 昇

○天塚（宮谷昌代主宰）一月号——「珠玉一句」欄  
枝折戸にかしづくかたち秋の草

鬼之介

○くぢら（中尾公彦主宰）一月号——「受贈俳誌美術館」欄  
冬麗やわが心中のスナイパー

鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）一月号——「受贈誌拝見」欄  
月明や庭に素面の老剣士

鬼之介

○駒草（西山陸主宰）一月号——「句誌めぐり」欄  
木脇祐貴氏の鑑賞により

鬼之介

地方紙にくるまれきたるラ・フランス

「水明」主宰 山本鬼之介

○知人からラ・フランスが送られてきた。一つずつ丁寧に包んでいるのは地元の新報紙であった。知人の優しい人柄や健やかに過ごされていることとともに、町の様子が浮かんでくるのである。

○新月（松田碧霞主宰）一月号——「受贈俳誌紹介」欄  
秋澄むや日脚のとどく勅使の間

鬼之介

○雪嶺（石本石鬼主宰）一・二・三月号——「受贈誌」欄  
折鶴の羽に入魂秋立つ日

鬼之介

鬼火鳴らす古里のなき者同士

○太陽（吉原文音主宰）一月号——「受贈誌御礼」欄  
秋澄むや日脚のとどく勅使の間

鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）一・二月号——「他誌拝見」欄  
兄妹のやうに語るや思ひ草

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）一月号——「諸家近詠」欄  
菊の日や夕陽あすわる長廊下

鬼之介

○山彦（河村正浩主宰）一月号——「句集燦燦」欄  
授かりし五感全開青き踏む

星野和葉

○山彦（河村正浩主宰）一月号——「諸家近詠」欄  
曼珠沙華咲かせ坪庭異界めく

鬼之介

○苜（山本一步主宰）一月号——「受贈誌の一句」欄  
城山の息をひそむる極暑かな

阿部幸代

秋の田のむせるほどなり無人駅

菅原真理

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）―令和五年一月三十一日現在―

丸山マスマ	加藤でん治	匿名	野口和子	高原和子	西山貴美子	新春俳句大会より				近藤徹平	大塚茂子	野田静香	越田喜恵	梅澤佐江	染谷風子	大場順子	綿貫ひさの	田中章嘉
3	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
福田千春	矢作水尾	森川義子	河野はるみ	山岸久美子	本橋稀香	曲淵徹雄	反町修	岡田宣子	西幅公晴	井口俊子	柚木治子	小林京子	宮崎チアキ	日高道を	山中みどり	―	合計	
10	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1	2	2	1	3	10	84	□	
□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	

誤植訂正

二月号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

〇二二頁下段

正 障子の穴に見ゆる景色の秘密めき  
誤 障子の穴に見ゆる景色花の秘密めき

# 俳句

4月号  
予告

3月25日発売

特別作品 一字多喜代子・若井新一・対馬康子

予価950円(本体864円)⑩

大 特 集

## 人生100年時代 定年後からの 俳句人生

柏原眠雨

- ▼総論 還暦過ぎてからが人生の春……
- ▼俳句の魅力 散文との違い／短歌や詩との違い
- ▼季語の魅力／定型の魅力／俳句で磨く老いの品格
- ▼俳句を学ぶ場所、師や句友を得る喜び
- ▼吟行の楽しみ、句材の探し方
- ▼六十代以降に詠まれた秀句50句選十鑑賞

特 集

## 名句と巡る名所旧跡

北海道／宮城／石川／長野／山梨／岐阜／京都／広島／高知／熊本

## 角川俳句賞作家の四季（春）……西生ゆかり

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

# 後記

「若狭水明会」から「野の花文  
化賞」を受賞されたという、何と  
も嬉しいお知らせが届きました。

檜鼻ことは氏が、この賞に関し  
て、若狭水明会に関して、本号に  
て詳しくお書き下さいました。氏  
の文を読ませて頂くと、皆様の俳  
句に対する熱い思いや、長い年月  
句会を続ける努力が伝わります。

この若狭へ水明では五月二九日  
（三十一日に、「若狭句碑めぐりバ  
スツアー」を計画しています。

水明では一月三〇日に「新春俳  
句大会」を行いました。昨年も一  
昨年も、ご案内をしては取り止め  
を繰り返していましたが、今年は  
主宰以下四十八名という多勢の皆  
様が参加され、無事、開催出来ま  
した。尚、今月号の保坂翔太氏  
のご報告の記事をご覧下さい。  
ある日突然、政府の方針で、マ  
スクの着用は任意となり、コロナ

の扱いてもインフルエンザなみにな  
るとか。水明でも、これからは色々  
な会が催行しやすくなるのでしょ  
うか。

次はある雑誌の対談記事の上野  
誠氏（万葉学者）の発言です。

「中国風に漢文の文章を長く書  
けるのは、山上憶良か、阿倍仲  
麻呂くらいでした。そこで素材  
を切って切ってシンプルにして、  
五七五七七にした。ついに七七も  
切ってしまった。黛まどかさんの  
いう「引き算の美学」です。」

そして、色々な会話の中で、建  
物や料理等は、豊かで教養のある  
人ほど、日本人のアイデンティテ  
ィとして素朴さやありのままの姿  
に美を見いだす。そして完璧を目  
指すより、とりあえず何とかなる  
と思っていたほうが良いという締  
めの言葉に、全てに安易な私は共  
感しました。

巻末に「春の吟行会」「若狭旅  
行」の申込書。「全国大会」の投  
句用紙を添付しました。よろしく  
お願いします。

（節代）

今月のはてな？

- 佳名（かめい）
- 千筋（せんすじ）
- 越辺川（おっぺ）川
- 遜（へりくだ）る
- 森森（びようびよう）
- 上枝（かみつえ）
- 鳩（かいつぶり）
- 鮮（あざ）やぐ
- 標（かんじき）

## 水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご用の方は 時間内をお願いします。)

72 ♪ 70 63 62 38 37 14 6 頁

# 水明

令和五年三月号

通巻一一〇号

令和五年三月一日発行

## 発行所

水明俳句会

〒330-0064

さいたま市浦和区岸町四一〇二二

電話 048-822-4741

## ホームページ

「水明俳句会」で検索

## 誌代

半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

## 同人費 (誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

## 季音同人費 (誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三三九三

## 発行人

山本鬼之介

## 印刷所

中央美版

# 「春の吟行会」参加申込書

〈申込締切 3月13日(月)〉

春の吟行会 4月4日(火)	会費 ¥1,000円	出席します
------------------	------------	-------

※「出席します」を○で囲んでください。

※受付時間・投句締切時間をご確認下さい。

上記参加費を添えて申し込みます。

2023年3月 日

住所	〒	
氏名	電話	( )

(申込書送付先：〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21)  
水明俳句会



# 若狭バスツアー参加申込書

〈申込締切 3月31日(金)〉

5月29日(月)~31日(水)実施の「若狭句碑めぐりバスツアー PART II」に参加します。

なお参加費は締切日までに、指定の振込用紙にて水明俳句会宛に振り込みます。

## 【乗車地】

さいたま市浦和区仲町 玉蔵院前

2023年3月 日

住所	〒		
氏名		電話	( )

(申込書送付先：〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21)  
水明俳句会

## ◎申込手順

- ① 本申込用紙にて申込（代金は送らないで下さい）
- ② 申込者に総務より振込用紙を送ります
- ③ 振込用紙を使って代金を振込んで下さい

総務部で直接お支払いする事も可能ですが、絶対に郵便では送らないで下さい。



# 水明全国大会投句用紙

☆投句締切 四月二十五日(必着厳守)

句数 通じて二句(一組) ・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。

・組数は制限しない。

出句料 一組につき 一、〇〇〇円(同封)  
用紙 足りないときは、コピーも可。

きりとりせん

兼題 「更衣」(ころもがへ)

兼題 「竹の秋」(たけのあき)

「金」詠込み

※73頁参照の事


都市又は府県名

姓並びに俳名

きりとりせん

兼題 「更衣」(ころもがへ)

兼題 「竹の秋」(たけのあき)

「金」詠込み

※73頁参照の事


都市又は府県名

姓並びに俳名



















## 季音抄

山本鬼之介

初夢に富士を登りし吾と会ふ  
初風や神話の島の明けそむる  
肖像画の楽聖たちへ篋子鳴く  
かりそめの手と手を繋ぐ置炬燵  
寒鴉哲学の目となりおほす  
初弾きや唄しんしんと部屋に満つ  
水仙や生涯教師たりし母  
米寿まで生きて春着の裾捌き  
天金の孤高の句集淑氣満つ  
傷心や春の時雨に濡るる髪  
猫柳水車は詩を奏でつつ  
母となる礼深々と初詣  
權棒に宿るかみのみ寒造  
初風呂の屋根の上より明烏  
竜の玉南総里見八犬伝  
元朝や何事もなき水の面  
蠟梅や静かに暮るる能舞台  
素つびんで赤城風を迎へ撃つ

鈴木康世  
田寺玲子  
十倉和子  
永野史代  
西山貴美子  
波多野寿子  
梅澤佐江  
井上玲子  
正木萬蝶  
池田雅夫  
鳥羽和風  
大場順子  
青木鶴城  
河野はるみ  
保坂翔太  
日高道を  
笹本啓子  
曲淵徹雄

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

### ▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内  
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

### ▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内  
(題をつけて)

### ▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由  
枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

# 水 明 抄

山本鬼之介

障子に鬼と狐鳩来て影遊び  
 編みかけのセーターほどき恋終はる  
 枯園や裸婦像の醜顕なり  
 冬霧や曙光を浴びて浮かぶ城  
 障子張り奥座敷までけふの陽を  
 黒セーター買ひ雑踏に紛れ込む  
 湯豆腐に独り語りのつきぬ夜  
 河豚碧し青磁の皿に盛りたれば  
 異界の人にあらずや夜半の枯芒  
 あてのなき散歩の先に冬木立  
 傍らに隠密のごと冬の蜂  
 衣桁には四つ身の晴れ着小春かな  
 寄せ鍋や百話飛び出す母百寿  
 かはたれは手負ひの武者に枯はちす  
 軍鶏鍋を食うて五鉄の吉右衛門  
 仲見世に買ふ桐下駄や年の内  
 島沈むほどに撓わや伊予蜜柑  
 白鳥の飛び立つ音や生くる音

小林京子  
 新 曆文  
 梅澤輝翠  
 反町 修  
 菅原真理  
 篠崎紀子  
 清水桂子  
 池田圭子  
 阿部幸代  
 元田亮一  
 丸屋詠子  
 越田栄子  
 山岸久美子  
 本橋稀香  
 渋谷きいち  
 染谷風子  
 横山君夫  
 西幅公子

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 境 延昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山崎みどり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗

水 明

令和五年三月一日発行 毎月一日発行

(第九十六卷 第三号)

定価 一〇〇〇円